
魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術の書

シュウキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術の書

【Nコード】

N8447I

【作者名】

シュウキ

【あらすじ】

魔術書に引き寄せられた少年がなのはの世界に飛ばされ事件に巻き込まれます。

この作品は主人公がチートなので気に入らない方は読まないことをお勧めします。

予告編（前書き）

小説初心者の処女作ですのでお手柔らかにお願いします。

予告編

その出会いは偶然か、

「その本に書かれているのは古今東西、ありとあらゆる次元世界の
魔術、魔法、能力が示されていて、使うことができます。」

それとも必然か、

「簡単に言えばこの本のマスターに選ばれれば、世界を征服することもできますし、壊したり、治したりすることができます。そしてそのマスターにあなたは選ばれました。」

力を与えられたのは一人の少年。

「……飛ばす前に聞きます、あなたはその本で何をしますか？」
「……別に何もしませんし、何にも関わるつもりもありません。」
「……はい？」

その少年が飛ばされたのは、別の次元世界。

「・・・ジュ、ジュ？」

そこで拾ったのは、・・・願いを叶える石・ジュエルシード

「なに、この石？ やけに光ってる・・・ん？何か書いてある。
・・・これは・・・数字？」

拾ったことによって、少年の意思とは関係なく少女たちと出会い、

「その宝石を渡してください。」

「さもないとガブツといくよ!」

「お願い。その宝石を渡してほしいの。」

「その宝石は、とても危険なものなんです。」

戦いに巻き込まれてしまっ。

「・・・何の用？」

「いいかげんにその宝石を渡しな！」

「さもなければ、あなたから力づくで奪い取ります。」

「・・・僕を巻き込まないでくれるかなあ・・・。」

「いた！あの子も一緒だ！！」

「・・・また増えたよ。」

少年が手にした本の力とは？そしてその力をどう使うのか？
ただ、わかっているのは少年の願い。

「・・・お願いだから僕に静かで平穏な暮らしをさせてください。」

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書 誠意作成中

「・・・とりあえず、巻き込んでくれたお礼はさせてもらおうよ。・・・
・僕のやり方でね。」

予告編（後書き）

感想、レビュー、誤字脱字などありましたらご報告ください。
又、クロスしてほしい作品がありましたらご要望ください。（でき
る数は限られてますが）

第一話 『出会い』（前書き）

何とか1話目完成です。とりあえずオリジナル部分が2話まで続く予定です。

第一話 『出会い』

暗い闇。

深く暗い黒に包まれた世界。

光の入らないその場所は、自分の姿さえ見えないほどだった。

僕はそこを漂っていた。

いつからここにいたのだろうか？なんで此処にいるのか？とか様々な考えが頭の中に浮かんだが、すぐに消えていった。こんな自分の姿すら見えない闇で何ができるのだろうか？

自分が今できることなんてわからないのに。

・・・しばらく時間がたつと何かが見えてきた。

それが光だと認識するのに時間がかかった。

暗闇に何年も、何十年もいた気分だったので、頭が考えるのを止めていたみたいだ。

やがて、光の方向に体が引っ張られる感覚があった。そこに連れて行かれるであろうことは、わかった。なので、とりあえずその感覚に任せることにした。そして僕の体は目も眩むほどの光に包まれた。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第一話 「必然的？な出会い」

光に包まれてからすぐに地に足がついた。その感覚によって呼ばれた場所に着いたのだと
感じた。つぶっていた眼を開き周りを見渡した。

黄色。

あたり一面は黄色に包まれていた。

あたり一面のヒマワリ畑。今まで見たことのない澄み切った空と白い雲、ヒマワリたちに僕は包まれていた。そのコントラストはとても美しく、僕はその景色に引き込まれていた。

「着いたようですね。」

「!!!」

いきなり声が聞こえた。

その方向に目を向けると、女の人が立っていた。

長く美しい黒髪。透明感のある白い肌。その人が純真であるかを示すような白いワンピース。

誰もが美しいと答えるような美女がそこにいた。

「はじめまして。私の名はマリア。あなたたちの言葉で言うと、女神と言われる存在です。」

「・・・女神？」

「そうです。」

「・・・ならあなたが僕をここに呼んだのですか？」

「その通りです。私が呼びました。」

「・・・僕、あの暗闇に飲み込まれる前は喫茶店で本を読んでいたはずなんです・・・。」

「ええ、あなたは一度死にました。トラックにぶつかって。・・・はい？」

えっと・・・意味がわからないんだけど？

「正確に言えば、あなたが本を読んでいた喫茶店に居眠り運転のトラックが突っ込み、衝突。あなたは即死、他の人は運転手も含め奇跡的に無傷で済みました。まあ、私の力でそうなるようにしたのですが」

「……なんで僕だけ……？」

「……それでそんなことまで引き起こして何のようですか？」

すると、マリアは答える代わりに一冊の分厚い本を取り出した。

その本自体は古い図鑑みたいなものだった。

「これは魔術書です。」

「……魔術書？」

「はいこれには、古今東西のありとあらゆる次元世界の魔術、魔法、能力が示されていて使うことができます。」

「……それで？」

「簡単に言えばこの本を渡すためにここに呼びました。」

「……それでその本を貰ってどうしろと？」

「何かしてください。できれば見てる側にとって、面白く暇をつぶせるような。」

「…….…….……はい？」

「……なんか頭が痛くなったのは気のせいじゃない。というかこんな話を聞いて殺意が芽生えたのは罪ではない。とりあえず今はまだ落ち着いて話を聞こう。」

「私は今までいろんな世界を観察していました。しかし長い間みているだけなので飽きてきたのです。そこでこの暇つぶしを思いつき

ました。」

「・・・ついてないってレベルじゃないな、これは。」

余計に頭痛がひどくなった。

「とりあえずこの本を受け取ってください。」

そう言つて本を差し出される。それを受け取ると本が一瞬光つたよう気がした。

「それで契約は完了です。」

「・・・契約？これからなにを・・・」

「あなたは今から別の世界に飛ばします。」

そう言つと僕の足元に魔法陣が展開された。今から別世界に飛ばされるらしい。

「その本に力の使い方などが書かれていますので詳しいことは、読んでおいてください。・・・それで、飛ばす前に聞きます。あなたはその本で何をしますか？」

「マリアはそう言った。何か期待してるような表情だったが、

「・・・別に何もしませんし、何にも関わるつもりもありませんよ。」

「

「・・・はい？」

最後にみた彼女の表情は笑顔ではあるものなにかきこちない感じだった。

なるほど、そう答えますか。だけどあなたはこれから起きる出来事に巻き込まれますよ。・・・確実にね。まーまずは着いた時の反応で楽しみましょう。ふふふ・・・

終わり（第二話に続く）

次回予告

いきなり飛ばされた異世界

「……同じくどこ？」

そこで突きつけられる現実。

「……うそだろ……。」
「 o r z

そして明かされる本の力。

「……これを使って何をしろと？」

はたして彼が異世界で踏み出す一歩とは？

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第二話「到着」

「……これからどうしようか……？まあ、なんとかするしかないよなー……はあ〜。」

第一話 『出会い』 (後書き)

感想お待ちしています。

第二話 「到着」(前書き)

遅れましたが二話目です。どうぞご覧ください

第二話 「到着」

あらすじ

変な所に連れてこられるため死にました。

女神といわれる頭の痛くなるような人と出会い、本を受け取りました。

どこかに飛ばされるようです。

魔法陣の光に飲み込まれた後、体の浮遊感を感じた。そしていつの間にか周りは暗闇に包まれていてどこかに引っ張られていた。しばらくそうしていると、光が見えてきた。

光は僕に近づきながら大きくなり、そして僕は光に包まれたんだ・
・。。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書
第二話「到着」

・・・ドスン!!

「いったー・・・。」

さっきよりも乱暴に放り出され、尻を強く打つたらしい。

あの女神がどうも乱暴に扱ったようだ。・・・でもそれよりまず確認しなければならぬことがある。

「・・・ここ、どこ?」

周囲を確認する。

・・・ここはどうかやらどこかの路地裏らしい。見たことないので知ってる土地ではない。しかしまだ異世界に飛ばされた実感がわかない。というか、僕のいた世界に似た感じだった。

とりあえず動こう。そう思って行動しようとしたが、ずりつと何かを引きずる音がした。よくよく考えてみると、なんだか体が重いし、視点も低い。手を見てみると周り比べて小さく見えた。いやな予感がして自分が来ている洋服を見るとだぼだぼだった。

「・・・うそだろ・・・。」 orz

どうやら僕の体は縮んでしまったらしい。

「・・・いったい、なにをしたんだ、あの人は？」

とりあえずさっきのシヨックから何とか立ち直ったのだが、これからどうしようか路地裏で考えていた。

「そう言えば、さっきの本はどこだ？何か魔術とかいっていたようだけど。」

そう言ってさっきの本を探すが見つからない。

「出てこい魔術書・・・って出るわけないよねー」

ポン！

「・・・出てきたよ。」

魔術書を開くと封筒が落ちた。その封筒を拾ってみると、

『この本について

by M A R I A』

と書かれていた。

・・・マリアってさっきの女神って言っていた人だったな。

とりあえず封筒を開け中身を見てみることにした。

中には手紙と鍵が入っていた。

『この手紙を見てるということは着いたみたいですね。とりあえずこの本について説明します。この本には魔術書ですので様々な魔法や魔術、術式、呪文が書かれています。アニメやゲームの内容を元にこの本を構成していますので使えると思います。・・・』

以下文章が長いので簡潔にまとめると。

一つ この魔術書の力によってアニメやゲームの力が使える。
二つ 魔法は本を展開せずに使うことができる。(呪文が必要なものは唱える必要がある)

三つ 詠唱破棄できるものもある。(鬼道など)

四つ 能力を使う際には宣言する必要がある(頭の中で唱えてもOK)

五つ この本はいつでも呼び出せ、人に盗られたり、別の場所にあってもすぐに呼び戻せる

六つ 他人にはこの本を使うことができない。

七つ 一応、自分で魔法を作り出すこともできる。(封印等、目的をはっきりさせれば。)

八つ 何かあればこの本を通して連絡する

・・・などである。

本当かどうかほとんど疑わしい内容だな。

また、こつちも書かれていた。

『あと体は小3くらいまで縮めといたのは、こつちにとって都合がいいし、何より面白そうだからよ。』

・・・とりあえず、生活に関しては、一応住むところとか色々用意してあるから紙のところに行きなさい。まあ、がんばってねー。』

なんか親切と迷惑が混ざった女神である。・・・迷惑のほうが9割占めているが。

とりあえず、服を何とかするために、本の力を試してみよう。

本を開きどつという力がいいか、思い浮かべる。まあここはハガレンかな？そう思い、

「能力、錬金術（version 鋼の錬金術師） 使用開始」

宣言すると、本が開き、ページに文字が浮き出てきた。そして頭の中に知識が流れ込んでくる。その通りに両手を合わせてから、服のイメージをし、両手を服にあてた。そうするとどうだろう。服が光りだして、だぼだぼだった服がちょうどいいサイズに変化したのだ。

「・・・錬金術、成功しちゃった・・・。」

正直に驚いた。というかこれで確かめられた。この本の力は本物だ。最初見たときは胡散臭かったし、まじめに取り組んでなかったのだが、実際に成功しているので信じるしかない。しかし・・・

「これを使って、なにをしると？」

この本は一言で言うと、異常だ。ふつうは考えられない空想の中の力を現実に行っているのだから。少し怖くなった。

取りあえず裏路地から出ることにした。もちろん本は消してある。正確には体の中にあるらしいが。出てみると、商店街だった。見渡すと大きな看板がありそこには、

『海鳴商店街』

と書かれていた。

どうやらここは、海鳴という町らしい。でもどこかで聞いたことがある地名だったが、その場では思い出せなかった。

紙に書いていた住所に何とか着いた。途中いるんな人に道を聞いていたのだが、平日の午前中だったので少し怪しまれたのだが、「今日この町に引っ越してきた。」というと、みんな納得してくれた。でもメイドさんがいたのは驚いた。周りは別に騒いだりしてなかった。いつでもどおりの日常なのだろう。メイド喫茶があるのかな？この町。

紙に書かれていた場所はマンションの一室だった。鍵はこの部屋のものだった。

中はワンルーム、キッチン、バス、トイレ付きの一人暮らし用の住まいで最低限の家具が付いていた。部屋のテーブルの上には僕名義の通帳があり、残高を見てみると、見たことのない桁の数字が書かれていた。少なくとも一生涯遊んでもなくならないような額である。

初めて女神に感謝した。

一応額が額なのでできるだけ節約することにした。あんまり使いすぎても碌なことがないし。それにはまず自炊かなと思ったのだが、

「……少しきつい。」

子供になっていたので、台所を使うには苦勞するのだ。

「……台を買おう。」

ここにきて初めて買うものが決定した。

ホームセンターで比較的軽めで折りたたみができる踏み台を買い、家に置いた後又出かけることにした。目的はこの付近の地理の把握と晩御飯の買い物だ。とりあえず生活に必要なものはそろっていたので、その分の買い物をしなないことは助かったのだが、家にあった食材は調味料ぐらいしかなかったのだ。家に何か食べるものが必要なのでスーパーにきたのだが……

「……またメイドさんがいるよ。」

またもやメイドさんが目の前にいた。先ほどはちらつとしか見ていなかったが、よく見ると秋葉原にあるようなミニスカートで、ハデハデではなく、ロングでシックな感じのものだった。青髪ロングの後ろ姿からは美人であることは、容易く想像できる。しかし……。

「……なんかあぶなっかしいな。」

見ているとなんというか、ドジっ子みたいな雰囲気があるのだ。・
・ああ、また人とぶつかった。訂正。あれはドジっ子である。

「……取りあえず巻き込まないようにしよう。」
「……なんかあの人のそばに行くとか巻き込まれそうな気がする。そう思い、メイドさんが向かっている方向とは違う方向から買い物始めることにした。」

スーパーでの買い物を済ませ、帰宅途中でどこかに休憩することにした。……手持ちも余裕あるし、どこか喫茶店にでも行こうかなと思うと目の前に看板があり、そこには、

『喫茶翠屋』

と、書いていた。……やっぱりどこかで見覚えがあるような？と
にかく入ってみよう。そう思い中に入ることにした。

「いらっしゃいますー。」

中に入ると、コーヒーの香りが漂っていて、比較的落ち着いた感じのなかなかい店だなと思った。

「お客様何名ですかー？」

「あ、一人です。」

「えっ、一人？」

「はい。」

僕に話しかけてきたの三つ編みメガネな女のひとだった。年は高校生くらいで黒いエプロンを身に付けた人だった。

「いや、ごめんね。子ども一人つてのは、珍しくて。」

「・・・ああ、確かにそうですね。」

いかん、いかん。今自分の体は小学生なのを忘れていた。行動とかを考えないと。

「それにしてもすごいねーその荷物。おつかい？」

「まあ、そんなものです。」

そう言いつつ案内してもらった席は窓際でなかなか眺めが良い席だった。

「それじゃあ、これメニューね。聞きたいことある？」

「えっと、・・・お勧めのデザートは？」

「うちの名物はシュークリームだよ。」

「じゃあ、それとコーヒーで。」

「はい。かしこまりました。」

ウエイトレスさんはカウンターの方に戻って行った。

カランコロン。

「いらつしや・・・なのはおかえりー。」

「ただいまー。何か手伝おうか？」

「うん、じゃあこれを7番テーブルまでお願い。」
「うん。」

そう、それがあの子との初めての出会い。

僕にとっては事実を知るきっかけ。

でもその出会いは、

物語の初めのページだと、

この時まで僕は、知らなかったんだ。

「はい、ご注文の品です。」

「あ、ありがとうございます……。」

「……ちよつと待て、なんでこの子がここにいる。普通にありえないでしょ。あれはアニメの中の話でしょ。」

「どうかしたの？」

「……いや、なんでもないよ。」

「そうだ、この子はきつとそっくりさんだ。うんうん、そうに違いない。」

「一人なの？」

「うん。」

「へえー珍しいねー。うちのお店って私と同じくらいの子が一人で来るのって珍しいから。」

「それさっきも言われたよ。」

「やっぱり。」

「この声、やはりあの子なのか？」

「あつ、そうだまだ私の名前言ってなかったね。私の名前は高町なのは、だよ。」

「……僕の名前はあまかわ天河 しゅう秀よろしくね。」

「うん。あ、お父さんが呼んでるから、またね。」

「そうやって彼女は戻って行った。……やっぱり間違いない。ここ、アニメの世界だ。それもリリカルなのは、だよなー。一回見たことがあるけどその世界に来るなんて思いもしないぞ普通。」

「これからどうしようか？……まあ、なんとかするしかないよな
ー、……はあ。」

「……とりあえずいただきますか。考えるのはその後で。」

いただいたコーヒーとシユークリームは絶品だったとだけ言っておこう。

家にたどり着いた僕は、とりあえず状況を整理することにした。とりあえず挙げていくと

- 一つ 魔法（異能）の力を使うことができる。
- 二つ ここは僕がいた世界ではない。
- 三つ 小学生くらいまで体が縮んでいる。
- 四つ ここはリリカルなのはの世界である可能性が高い。

今わかっていることはこれくらいかな？問題は今のどのあたりの時期かということだ。たぶん予想としてジュエルシードの事件の最中だと思う。理由としては彼女が身に着けていたデバイスが見えたこと、4月であること、後あの女神が十歳にまで縮めたということから考えると、この事件に関わらせようという考えだろう。暇つぶしで僕をこの世界に送るくらいだからな。

ユーノとは会っているはずだから、フェイトがこっちに来ているか

どうかにもよるな。

・・・まあ、基本的に関わらなければいいからほっとしよう。
そう結論を出し眠ることにした。

その考えが甘いということにまだ彼は気づいていなかったが。

T o b e c o n t i n u e n e x t s t o r y .

次回予告

平穩に暮らそうと思った彼だったが。

「おいおいおい・・・、なにあれ？」

そうそうその考えが通じるわけがない。

「かんべんしてよ〜。」

ジュエルシードに関わってしまっ。

「倒せたのはいいけど、どっつするっね。」

そして・・・

「そのジュエルシード」っちに渡してくださいませ」

黒き魔法少女との邂逅

「いやだ、と言ったら？」

物語のページは進んでゆく。

次回 魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書 第三話 「
邂逅そして戦いへ」

「まったく、どうしてこう何度も面倒事に巻き込まれるのかなー。
はあ。」

Don't miss it.

第二話 「到着」(後書き)

後書き

お待たせしました第二話です。結構苦しみましたけど、なんとかできました。第三話で戦闘シーンを初めて書くので少し緊張です。またお待たせするかもしれませんが、頑張りますのでよろしくお願いします。

第三話「邂逅そして戦いへ」(前書き)

感想お待ちしています。

第三話「邂逅そして戦いへ」

あらすじ

異世界に到着しました。

不思議な力が使えるようです。

ここがリリカルなのはの世界だとわかりました。

「おいおいおい・・・、何あれ？」

天河秀、今、目の前に大きいオオカミがいます。

てか、これやつぱりジュエルシード？・・・あっ、こっち見た。

『ガールルルル』

これやばいな。

『グオー！！』

「かんべんしてよー。」

追いかけてここが始まりました。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第三話「邂逅そして戦いへ」

やばいやばいやばい。なんでこうなる？ただ買い忘れがあつて夕方買い物に行った帰り道に事件に巻き込まれるなんて、普通ありえないでしょ！！

巻き込まれないようにしようと、考えた翌日に巻き込まれるなんて、あの女神のせいだ、クソツ！！（女神は何もしていません）
・・・そう考えるとなんかイライラしてきた。逃げるのはやめ！あいつぶつとばす！！

逃げるのを急停止し振り返る。オオカミはこっちに対し牙でかみつきこうとした。僕は魔力強化した足でバックステップし避ける。着地すると相手との距離は少し空いた。
ならこれで。

「すべての力の源よ、輝き燃ゆる赤き炎よ、わが手に集いて・・・」
オオカミはこっちに向かって突進してくるが・・・

「明りよ（ライティング）！！」

光に飲み込まれた。

S i d e ? ? ?

私達はジュエルシードの反応があつて駆け付けた。そこには私と同じくらいの子供と、ジュエルシードの影響を受けた大きい獣が向き合っていた。

「フエイト、あの子危ないよ。」

「うん、早く行かなきゃ。」そう思っていたけど獣の方が速く動き、襲いかかる！！その瞬間に子供の方から強い光が発せられ思わず目をつぶった。

・・・眼を開けると子供の姿は見えなくて、獣だけがいた。

「消えた…?」

「居なくなつたんなら、ちょうどいい。早くあいつを倒して回収に・
・。」

「待って!!」

「えっ?」

いやな予感としてアルフを止めた瞬間、光が獣を貫き、遅れて轟音が鳴り響いた。そしてその光は空に消えていった。

獣も消えた時残っていたのはさっき消えたと思っていた子供とその

手にあったジュエルシールドだけだった。

Side???

End

光で目くらましをした後、僕はオオカミの下に回り込みながら宣言する。

「能力、電撃使い（エレクトロマスター）、使用開始。」

そしてその際にコインを用意する。・・・ここは一撃で決める。

体をバチバチと雷撃がほとばしる。空間を、空気を焼き、力を溜めていく。オオカミは僕の姿を探していた。・・・僕が下にいると気付いたようだがもう遅い！！

蓄積していた電撃をありつたけ込めて右の親指でコインを弾いた。

そして打ち出されたコインは一筋の閃光となってオオカミを貫いた。コインは轟音を上げ空に消えていき、オオカミはあの一撃でやられたのか霧散した。

僕が使ったのは超電磁砲^{レルガン}、簡単に言えば火薬を使わない大砲である。確か電流が発生させる相互の磁場によって弾を発射させるものである。（詳しくはウィキペディアで）。

これは御坂美琴ver. のものだが何とかうまく使えた。・・・少し頭が痛いけど。多少電流のコントロールで頭を使ったせいかも。そこから光り輝く石が出てきた。それを手に取ってみると、青くて、中に力が込められているような感じがした。

「・・・これが原因か。」

そう、これこそが事件の原因であるジュエルシードだ。まさか自分が関わるとは思ってなかったけど。

「倒せたのはいいけど、どうする？これ。」

これ、このまま持っているのはまずいよな。明らかに事件に巻き込まれるパターンだもん。(もう巻き込まれてるよという突っ込みはスルーします。)

まあ、どこか離れた人気のないところに置いておくことにしよう。そしたら関係者に会うことはないだろうし、だれも巻き込まれないから。・・・そうと決めたら実行あるのみ。

いつまでもここにいたら関係者が来るし。そうやって動き出そうとしたら・・・。

「待つてください。」

後ろから声をかけられた。

・・・今度は水樹菜々ボイスかよ。そう思い後ろを振り返る。そしてたらそこには金色の長い髪をツインテールにした、黒のレオタードにピンク色のスカートを付けて、金色の鎌を持った死神風味な少女と、オレンジ色のオオカミが居た。まあ簡単に言うとフェイトとアルフだ。

・・・手遅れか。そう思い答えることにする。

「・・・何？」

「そのジュエルシードを渡してください。」

「これ？」

「そう言い手元にあるジュエルシードを指す。」

「そうだよ。早くそれを渡しな！！」

「アルフが叫ぶ。」

「うわっ！！オオカミが喋った。」

「喋るのは知っていたが、生で見るとびっくりするな。」

「あんた魔道師だから、知ってるだろうが！！」

「何のこと？」

「とぼけたって無駄さ！！さっきの攻撃で獣が消えたのを見てただよー！！」

「・・・ちよつと待て」

「なあ？」

「僕はフェイトに確認する。」

「はい？」

「いつから見ている？」

「獣と向き合っているところからです。」

「まじで？」

「はい。光で目くらまししたところや攻撃して獣が消えたところも含めてです。」

「・・・うつわく。」「思わず頭を抱えた。」

「・・・戦つてるところを見られたとなるとやばいな。説明しても通じないだろうし。」

「と、とにかく、早くどうするか答えな！！」

「アルフが急かすようにいう。仕方ないこうなったらやるしかないか。」

「いやだ、と言ったら？」

「挑発するように言つと、」

「力づくで奪います。」「ガブツとする。」

「ほぼ同時に答えられた。」

「即攻撃かよ・・・。」

「で、どうするんだい。」

「すべての力の源よ、輝き燃ゆる赤き炎よ、わが手に集いて・・・
明りよ（ライティング）。」
「やっぱりここは即撤退。ライティングで目くらましをして一目散に
逃げ出した。」

「・・・！！アルフ！！」

「わかつてるよー！！」

二人とも気がついて僕を追いかけてくる。何か言っているようだが
それは無視する。

とにかく早く逃げてやる。

「ぜえぜえ、はあはあ。」

取りあえず巻くことはできたようだ。今いるのは、近くの山の森の
中にある。一生懸命走ったかいてもあったようだ。森を歩いていると
開けた場所に出た。そこは広場みたいになっており。開けた場所だ
った。

「ようやく来たな。」

「早くそれを渡してください。」

僕とフェイトは互いに向き合って構えている。フェイトは大きな鎌を持って、僕は何も持たず、ゆったりとした感じで立つ。・・・フェイトが仕掛けてきた。一気に突進して僕との間合いを詰め、鎌を大きく縦に振りかぶり切りかかってきた。

「能力、電撃使い（エレクトロマスター）、使用開始。」
そう宣言し電撃で攻撃する。しかし電撃は直前でフェイトを避けるような軌道を描いた。

（うそっ、なんで!?!）

そうしてる間にもフェイトが攻撃の間合いに入ってきて仕掛けてくる。それはバックステップをして避けれたが服が破れてしまった。なら、直接!?!

鎌を振りぬいた瞬間、僕は前に出る。フェイトもそれに気づき後ろに下がるうとするが、その前に僕が彼女の腕をつかみ下からせない。僕が電流を彼女に直接流そうとするが彼女には直接流れ込まない。・・・まさか!?!

横から何か飛んできた。僕は手を離してすぐに下がる。僕の目の前を金色の魔力球が通りすぎる。僕は思い切り後ろに跳び彼女との間を開けた。

「もしかして、電気を使えるの?」

「うん、まさかそっちが感電させようとするとは思わなかったよ。・・・というか今さっきの電流普通に感電死するレベルだよね!?!」

「・・・キノセイダヨ、キノセイ。」

あまり使いなれてないからなこの力。

「・・・なら、遠慮は無用だね。」

<sonic move>

電子音がしたと思ったらいきなり目の前の彼女が消えた。

そうすると寒気がした。それに従い僕はしゃがんだ。僕の頭の上を金色の鎌が通り過ぎていた。僕はそこから回転し足払いをしようとしたが空振りだった。彼女の足は地についていない、つまり飛んでいたのだ。僕はまた下がる。しかし彼女はそれを許してはくれない。
<sonic move<

いきなり目の前に現れ鎌を振るう。僕は何とか避けようとするが、間に合わないので

「フォースシールド」

障壁を出してガードした。鎌がシールドに当たった時そこからバチバチと音が鳴る。

やばっ！シールドが破れる。

「ブレイク！！」

咄嗟に僕は下がりシールドを爆破した。彼女もそれを察知してすぐに下がった。どうやらダメージはあまりないようである。

「・・・やるね。」

「正直、ギリギリだけだね。」

はつきり言っただズイ。僕は接近戦はあまり自信がない。対して彼女は接近戦に関しては訓練しているようで、一枚も二枚も上手だ。まあ原作通りだし。誤算は彼女の魔力、つまりは魔力変換技術が高いことだ。先ほど魔力を電気に変換し、僕の電撃を受け流したようだ。

これからどうする？魔法は詠唱中に距離を詰められてアウト、能力系は？東方系は正直使いこなせるかは微妙で、怪我させてしまうかもしれないし。他に何か一瞬で方が付くのは・・・あっ！！そうだあれなら相手に怪我させるリスクも僕が怪我するリスクもない。

僕はその能力を頭の中で宣言し待ち構える。そうすると彼女はいきなり鎌を横に振りかぶる。

「ハーケン・セイバー！！」

すると金色の鎌の部分が僕に向かって回転しながら飛んでくる。

普通には避けられない。間に合わない。そう思わせた。

Side フェイト

・・・早く母さんに笑顔になつてもらいたい。早くあの頃の母さんに戻つてほしい。そのためにも早くジュエルシードを集めないと。今から放つ技は攻撃範囲が広く速度も速い。相手に向かつて飛んでいく誘導性能もあり彼では避けられないものだ。こんなところで立ち止まっているわけにはいかないの。・・・ごめんね。

私のはなつた斬撃は孤を描きながら彼に迫っていく。決まった。そう思った瞬間、彼の姿はいきなり消えた。次の瞬間目の前が暗くなった。

Side フェイト end

僕は能力を使い彼女の後ろに回り込み首元に手刀をいれ彼女を気絶させた。僕が使ったのは瞬間移動テレポートである。・・・というか初めからこれ使つて逃げればよかつたな。

フェイトは今僕が支えている。・・・軽いなこの子。ちゃんとご飯

食べているのか？そういつた疑問を頭の中で考えてたのだが、

「フェイト！」

アルフは今にも襲いかかりそうな雰囲気だ。・・・先にこつちだな。

「待って、これ以上は戦いたくない。」

「そんなことより、早くフェイトを返せ！！」

「今からそつちに渡すから落ち着いて。」

やばいかなり興奮状態だ。

「とりあえず、そつちは攻撃しないでね？そしたら反撃してしまつて、彼女が怪我してしまうから。」

そう言つて僕はフェイトを抱え直し、お姫様だっこをして抱え、アルフに渡した。

てか、いつの間にか人型になつてる。

「あ、そうだ。さっきの条件だけど・・・。」

「なんだい！？」

「あれなかったことにして。」

「・・・はあ？」

いきなり困惑した表情になった。そりゃそうだろういきなり賭けに勝つたのに、賭けを無効にしてと言つているようなものだから。

「彼女と戦つてなんとなく事情があるつてわかつたんだ。それに彼女好き好んで戦つてないみたいだし。」

「・・・そうかい。」

「後これも渡しとく。」

そう言つて僕はジュエルシードを差し出した。

「・・・礼は言わないからな。」

「構わないよ。こつちとしてはあなたたちと戦う理由がなくなるわけだし。まだ僕にはこれを封印する方法がないからね。」

「・・・変わったやつだな。」

「そうかな？まあ、彼女のことよろしく頼むよ。」

「言われなくてもわかってるよ。フェイトは私のご主人さまだからな。」

「・・・ううん？」

「フェイト!？」

「どうやらフェイトが気が付いたようだ。」

「・・・あれ？アルフ、私。」

「フェイト、大丈夫かい？」

「アルフが心配そうな顔をする。」

「・・・私負けたんだね。」

そう言つてフェイトは悲しそうな顔をした。負けたことを自分から悟つたようだ。

「・・・いや、君の勝ちだよ。」

「えっ!？」

驚いてこちらを振り向く。

「確かに君は戦闘では負けたけど、君の思い、君の強さが伝わった。だから君の勝ちでいいよ。」

少しフェイトは呆けた感じになっていたが、くすくすと笑った。

「優しいんだね。」

「・・・違うよ。」

そう言つて僕はフェイトとは違う方向に顔を背けた。・・・やばい。少し顔が赤くなっているかも。

「じゃ、そうゆうことにしといてあげる。」

「・・・なんか本当に負けた気分だよ・・・。」

「いかん、相手は小学生だぞ。・・・しっかりしよう。うん。」

「・・・そつだ、名前。」

「えっ？」

「君の名前。」

「・・・僕の名前は天河秀だよ。」

「シユウ？」

「うん、そつ。」

フェイト達の足元に魔法陣が展開された。どうやら撤退するみたいだ。

「じゃあね、シユウ。」

「うん、今度会うときは厄介事がないといいけどね。」

「・・・うん、そうだね。」

「じゃあね、フェイト。」

「うん。」

そう言っただけで彼女たちは消えていった。

Side アルフ

アジトに帰ってからフェイトの様子が少し変わった。前の追い詰められた感じが和らぎ、食欲も多少ながら戻ってきた。原因は言うまでもなくあのシユウっていうガキだ。

フェイトを倒したただけではなく、心まで開かせたあいつはすごいと思う。

私かい？私はフェイトが幸せなら文句はないさ。少なくともあのクソババアよりはましさ。

まあ変わったやつだけど、いい奴みたいだし。そういえばフェイトが変わったことがもう一つあった。アジトに帰った時シユウがフェイトを抱きかかえられたことを話すといきなり顔が赤くなって、いくら目の前で手を振ったり話しかけてもぼーっとしてるんだよ。しかもそれも時々なったりして私は驚いたよ。近いうちにまた会うだろうし、そんなときにどうなるかが楽しみだね。

Side アルフ end

フエイト達が去った後、僕は家に戻った。すると突然頭痛が走った。1日寝て治まったが原因は能力の使い過ぎだ。レポートも電撃も頭の中で計算し使っているので、脳がオーバーヒートを起こしたのだ。

・・・もう少し練習しないとなあ。

後、魔法を二つほど作り出した。一つ目は封印^{シーリング}二つ目は創造^{クリエイト}だ。一つ目はもちろんジュエルシード封印用、もう一つは魔力からアイテムを作り出すためのものだ。

先日戦った時まずいと感じたので僕はマジックアイテムを作ることにした。決めたのだ。そうすれば接近戦にも対応できるし。・・・最初は関わらないつもりだった。でも今日みたいに巻き込まれることも十分考えられる。手札は多いに越したことはない。

・・・なんか女神の思ったように進んでいるのは気に食わないがかたない。

「平和な日々を暮らしたかったんだけどな。・・・はあ。」
おもわず、ため息が出るのはしかたないと思う。

T o b e c o n t i n u e n e x t s t o r y .

次回予告

「どっしてこう巻き込まれるのかな……。」

目の前で起こるジュエルシードの暴走。

「あっ、きみは。」

「へっ？」

予期せぬ再会

「お願いだから話を聞いて!!」

目の前で起こる二人の少女の戦い。

「まったく、無茶するよほんとに。」

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第4話「理由」

「なんで、・・・君は戦っているの?」

D o n ' t m i s s i t .

今回つかった他作品の魔法・能力の紹介です。

明り(ライティング) スレイヤーズより
宙に浮く光る球体を生み出せる呪文。球体は熱を発せず、水に入れ
ても消えることはない。呪文のアレンジによって、光量の調節が可
能だが、呪文の持続時間と光量は反比例するため、持続時間をゼロ
にすると閃光のような強力な光を生み出せ相手の目を眩ませること
ができる。(ウィキペディアより)

電撃使い（エレクトロマスター）とある魔術の禁書目録より
御坂美琴が使う能力で電撃を発生させたり、それによって磁場を作り出し操る能力。体から常に微弱な電磁波が出ておりその反応によって索敵することも可能^{ソナーみたいなもの}。あとこの能力を使ってパソコンをハッキングできたりもする。

瞬間移動^{テレポーター}とある魔術の禁書目録より

白井黒子の使う能力で自分を含め触れたものを瞬間的に移動させる能力。物資の内部に送ることもでき、コンクリートを切断することができるが、能力を使うには複雑な座標計算と演算能力が必要とされるため、秀の脳がオーバーヒートしかけた。

フォースシールド テイルズオブシンフォニアより
体を覆う球体のシールドで魔法攻撃に対する防御法。1面だけに厚く展開することもできる。（一部オリジナル）

第三話「邂逅そして戦いへ」(後書き)

後書き

ここまで読んでくれてありがとうございます。どうでしたか？初めての戦闘とキャラ別の視点を書きましたが、原作キャラの性格の表現に少し不安を覚えています。がんばって書きますので応援と感想の方よろしくお願いします。あと、クロスさせたい作品もまだ募集しています。(今のところSHUFFLEは決まっていますので、あと1、2作品はクロスさせようと考えています。)

遅れましたが、明けましておめでとうございます。今年もこの作品をよろしく願います。

p.s PVが15000を突破しました。ありがとうございます。

第4話「理由」(前書き)

感想お待ちしています。

第4話「理由」

あらすじ

ジュエルシードに関わってしまいました。

フェイトと戦って勝ちました。

仲良くなりました。

フェイトと戦った翌日から僕は能力の訓練をした。失敗も結構あった。

失敗例、その1 電撃使い（エレクトロマスター）

電撃の練習を屋上でやっていたら、やり過ぎて周辺に謎の停電事件が起きた。

電撃をうまくコントロールする練習をしていたときに間違って雷雲を呼び寄せてしまって落雷が起きてしまった。能力を使って難を逃れたのは、よかったんだけど、落雷の影響で周辺地域で停電が起きてしまったのには驚いた。そのせいで冷蔵庫が止まって冷やしておいたアイスが溶けてしまっていたときは絶望を感じたね、うん。

失敗例、その2 テレポーター 空間移動能力者

リングを移動させようとしたが誤って、テーブルにリングを生やすという変わったオブジェができてしまった。

練習がてら、台所に置いておいたリンゴをテーブルの上にテレポーターさせてみると、テーブルの中央からリンゴが上半分だけ出た状態で転送されたんだ。

引っ張つても取れないので試しにテーブルの面に沿って切ってみるとテーブルの中にリンゴが埋まっている状態で、リンゴだけくりぬくと穴のあいたテーブルができてしまったよ、ははは。・・・フエイトの時下手したら体の中からこんには、だったのか・・・そんなのエグ過ぎだろ。

など、いろいろ練習した結果何とか使いこなすことができた。・・・これ女神がちょっといじくつたよなあ絶対。1日でマスターできるはずねーもん、普通。あと頭痛の方も使いこなすうちに無くなっていった。まあ座標計算とかすべて計算なので訓練しだいでよくなるのだ。おかげでスーパードで買い物する時、暗算で計算できるようになったのは結構な収穫だ。

僕が新しく作った魔法は上手いってる。封印は一回ジュエルシートシーリングで試してみると簡単にできたし、創造も上手いってる。クリエイトで作ったアイテムはまだ使ってないけど。

なので、手元にはジュエルシートが2個ある。何とか鉢合わせにならないよう遠くのを回収したので問題はない。しかし・・・

「これ、やっぱり渡すべきかなー」

一応手元に2個あるわけで、フエイトに渡そうと思ったんだけど、どこかにアジトがあるのか知らないの探しようがないのだ。もう一方に渡すことも考えたがいきなり渡されちゃ怪しまれるので、渡せる相手は自然と決まってくるのだ。

「まー、そのうち会えるでしょ。」

気楽に考えることにした。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書
第4話「理由」

「どうしてこう巻き込まれるのかな……。」

今、目の前でジュエルシードが暴走してます、って何これ！！普通に今までよりでかいし！！なんかでかい木がうにゃうにゃと動いている。

「……やるしかないか。能力使用、電撃使い（エレクトロマスタ―）」

そう思い能力を使おうとすると、横からピンク色の砲撃が飛んできた。その方向から白い服をきて飛んでいる少女がいた。その子はつまり高町なのはだ。

「……おいおいここで遭遇かよ。」

「えっ！？ユーノ君まだ中に人がいる！」

「うそ！？境界内には人が入れないはずなのに。」
「どうやら僕は境界の中に入り込んでしまったらしい。……ついでないなちくしょう。」

木の方は先ほどの砲撃から回復したようで根っこが僕の方に伸びて

きた。

やばっ！！そう思い咄嗟に横に飛び込みかわした。しかし木の根は方向転換し僕を狙ってきた。

僕は電撃を放ち木の根に当て焼き切って木の根を止めたが、別の方向から木の根がのびてきた。

しかしそれは金色の砲撃によって阻まれた。その方向を見ると、そこにフェイトがいた。

「大丈夫!？」

「・・・うん、ありがと。」

そう言っ僕は宙に浮いた。一応練習はしていたので飛べるようにはなっているのだ。

「あなたも魔道師ですか？」

「・・・違う、ただ巻き込まれただけだよ。」

近づいてきたなのはの肩に乗るユーノが尋ねてきた。

「あっ、秀君」

覚えていたか。

「高町さん、今はそんなことよりこいつを何とかしないと。」

そう言っ木を指さす。木はフェイトからの砲撃のダメージから回復していた。

「そうだね、・・・って名前と呼んでよ!!!」

「なのは、それは後にしよう。」

ユーノが落ち着かせようと声をかける。なんか呟いてるみたいだけれども、今は無視することにする。

フェイトもこっちに飛んできた。

「久しぶり。シュウ」

「うん、フェイトも。まさかまた厄介事の中で再会するとは思わなかったけど。」

そう言っ肩を上げる。フェイトはなんだか苦笑いしている。

「・・・知り合いなの?」

なのはが尋ねた。

「知り合いと言えば知り合いだけど・・・」

「・・・その子は知り合い？」

フェイトが訪ねてきた。

「うん、そうだけど・・・。」

なんかここ変な空気流れてない？

なんかあの木もこっち攻撃するのわざと避けてるみたいだし。

そうしてその空気に居たたまれない中、声が響いた。

「ちよつとフェイト、シユウ！早くこっちを手伝っておくれよ！

！」

アルフがあの木の手を一人ですしていたのをやめこっちに来た。

「「「ごめん、忘れてた。「「「」

「とりあえず、この木を何とかするまでは協力するでいいね？」

「「「うん」「「「わかったよ。」

一応このジュエルシードを何とかするまでは、協力することで話は着いた。

あの空気は少しつらかった。

「しかし、どうするんだい。あの木切つてもすぐに再生するみたいだし。」

「ユーノ、一つ確認していい？」名前は前もって確認している。

「はい。」

「この結界の中だと外に影響はないんだね？」

「ええ、一応外とは隔離してますのでここで建物を破壊しても、影響はないはずです。」

「じゃあ、ある程度の魔法なら耐えられると?」

「そういうことになります。」

「・・・ならみんなは動き回って敵の注意をひきつつこれ以上大きくなるのを防いで。」

「あんたはどうするんだい?」

「隙をみてでかいダメ　ジを与えます。合図をしたら敵から離れて。」

「

「わかったよ。」

その一言でみんな散らばって行動を開始した。

「なら、始めるか。」

そう言っただけはビルの上に着地した。そして目をつぶり体の中にある魔術書を開いて使う魔法を選択した。呪文や扱い方が頭の中に入ってくる。そしてその魔法を発動させるため集中を始めた。

Side　なのは

秀君が準備している間に私達はジュエルシードに取りつかれた木に向かっています。

秀君、なんであの子と仲いいのかな?普通に名前呼び合ってたし。なんで私には名字でしか呼ばないのかな?・・・なんだろう、なんかイライラしてきたよ。あの木を倒して秀君とあの子にお話しさせてもらうんだから!!

(この時肩に乗るフェレットとデバイスなのはから出る黒いオーラに怯えてガタガタ震えていました)

Side　なのは　end

S i d e フ ェ イ ト

伸びてくる枝や根をかわしながら鎌で切り取る。
だけどもまたそこから再生してくる。

・・・厄介だね。せめて核を攻撃できればいいんだけど、砲撃を撃つてもそこからすぐ再生してしまうから届かない。

一人だったら少し厳しいかも。でも今ならシユウがいる。あの子とだったら何とかできるかもしれない。・・・厄介事のない時に会いたかったんだけど。ジユエルシードを集め終わったら一緒に遊べるといいな。そしてお母さんに友達として紹介しよう。

<みんな、離れて!!>

彼から念話が届き、全力でそこから離脱した。

彼の方を見ると足元に青い魔法陣が展開されていた。何か呪文を唱えてる？それにあの魔法陣はミッド式じゃないよね・・・。
彼が腕を横に振った。その瞬間、巨大な氷が木の上から降ってきていた。

S i d e フ ェ イ ト e n d

僕の足元に魔法陣を展開させ、みんなに離れるように、指示した。
全員離れたのを確認し僕は詠唱を開始した。

「凍結は終焉、せめて刹那にて砕けよ!!」

これで終わりにする!!

「インブレイスエンド!!」

木の上に巨大な氷が出現し、落ちていく。

木の根元も氷漬けになっているので根を伸ばすことはできない。

枝を伸ばしても氷に触れた瞬間に凍って砕けてしまった。

やがて木の本体に氷がぶつかり木全体が凍った。そして巨大な氷の

重さによって木は砕けてしまった。氷も当たった瞬間粉々に砕け、残ったのはジュエルシードとその周りを舞う氷。光が氷に反射し、きらきらと光る光景は綺麗だった。二人、フェイトと高町さんが動いた。ジュエルシードに砲撃を加えた。

「リリカル・マジカル！」

「ジュエルシード・シリアル19」

「封印！！！」

二つの砲撃が同時に当たり、ジュエルシードは封印状態へと落ち着いた。

「やった！なのは、早く確保を！」

「そうはさせるかい！！！」

「……あ！」

ジュエルシードの確保をしようとしたのはとユーノにアルフが襲いかかっていた。

その攻撃をユーノが弾く。しかし……

「……くっ……あ！」

衝撃までは吸収できずに後退する。フェイトも結界の前に移動していた。

高町さんは一歩前に踏み出した。

「この前は自己紹介できなかったけど、……私なのは、高町なのは、私立聖祥大付属小学校3年生。」

< S r i h e f o r m >

「あ……！」

バルディッシュから音声が流れ、高町さんはレイジングハートを構えた。

「……ふっ！」

「あっ！！！」

フエイトはなのはへと襲いかかるが飛行魔法を発動しかわす。・・・
てか、ここで戦闘!?

おいおいおい・・・封印したとはいえ、まだ不安定なジュエルシードの前で戦うか、普通!?

仕方ない。なら先に行つて、封印を強固にしなきゃ。

そう言つて飛行魔法を使用して、ジュエルシードに近づこうとするが、

「まちな!!!」

アルフが立ちふさがつた。

「そこをどいて!」

「今、あのジュエルシードを取られるわけにはいかないよ。」

「違う!!取りに行くんじゃない、封印を強固にしなきゃ危ないんだ!!!」

「それでもさせないよ!!!」

「人の話を聞け!!!」

アルフが襲いかかってくる。一旦下がり、着地したが、そのタイミングで追い打ちをされる。

両腕をクロスしてガードをするが、威力を殺すことができずに吹っ飛んでしまう。

何とか着地できたけど、やばい。あいつ、フエイトのことしか見えてない!!!

「能力使用、電撃使い(エレクトロマスター)」

そう言つて地面を蹴つた。一気にアルフとの距離を詰める。

少し驚いたようだが、かまわず殴りかかってきた。

顔を狙ってきたパンチを体勢を低くしてかわし、懐に飛び込んだ。

「少しどいて!!!」

そう言つて僕は彼女の腹部にパンチをかましつづ、電流を流しこんだ。

「ぐっ・・・ガアアアア!!!」

そう言つて倒れた。

一応手加減したので大丈夫だろう。
ジュエルシードをみると、何やら先ほどよりも光っている。このままだとまた暴走するかも。
急いで封印しないと。

上空ではまだ戦いは続いている。

「フェイトちゃん!!」

「っ……あ……!!」

なのはの叫びにも似た呼びかけに、フェイトの攻撃の手が止まった。「話し合うだけじゃ……言葉だけでは何も変わらないって言ったけど、ただど離さないと……言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!ぶつかり合ったり、競い合うことになるのは、それは仕方のないのかもしれないけど……だけど何も分からないままぶつかり合うのは、私嫌だ!!」
なのはの言葉によって、フェイトの瞳は揺れる。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから、ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから……私はそのお手伝いで、ただどお手伝いをするようになったのは偶然だけど、今は自分の意志でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしてる街や、自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから!……これが私の理由!」

「っ……私……」

「フェイト答えなくていい!!」

フェイトが答えようとすると、アルフによって遮られた。

アルフは先ほどの電撃の影響かところどころ焦げている。

「……あ!?!」

「優しくしてくれる人達のところで、ぬくぬくと甘ったれてるガキンチヨなんかにも何も教えなくていい!?!」

「えっ!?!」

「私達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ!?! シュウがもう向かってるよ!?!」

フェイト達はその方向を見ると、すでに秀が封印のかけ直しを始めようとしていた。

「^{シーリング}封印」

そう言うて僕はジュエルシードに封印を開始した。しかし暴走寸前だからか、なかなかコントロールを掌握できない。

魔力がさっきより上昇してる。このままだとまずい。そう思っているとフェイトとなのはがジュエルシードに突っ込んでいく。そして

ガシンッ!?!

ジュエルシードを間にレイジングハートとバルディッシュがぶつかり合う。

すると二つのデバイスはひび割れを起こしていく。

「きゃあー!?!?!」 「くっ……う……くっ……う……!?!?!」

「っ！クソツ！能力使用、空間移動能力者！！」
そう言つて能力使用し二人の体に触れ3人一緒に転送した。
その後ジュエルシードが激しく光り、辺りを光が飲み込んでいった。

「フェイト！？」

「なのは！？」

それぞれが名を呼ぶが光によって視界がほぼ0であり、安否を確認できずにいた。

「っ……」

「くっ……」

「ぜえ……ぜえ……何とか……間に合った……」

先ほどの転送によって少し離れたところに転送したが、やばい、いきなり3人はきつい！一人なら余裕だけど、一緒だと脳への負担がはんばない。

「えっ！？」

二人が僕の方を見る。

「ぜえ……すう……二人とも無茶すぎだよ！！ばか！？

二人とも馬鹿なの！？あんなところで戦闘なんて、馬鹿のすることだよね！？」

「ひっ！！」

二人とも突然の大声にびっくりしてしまう。

「普通、あんな不安定なところで戦闘したらこんなことになるってわかるよね！？今まで封印しているんならなおさらだよね！？……ふう……まったく封印しようとしたらアルフが邪魔してくるし……」

「えっ！？じゃあアルフがボロボロなのは……」

「ちょっとビリビリっとな。・・・一応正当防衛だから。主人思いなのはいいことだけど周りをもうちよつとよく見ろって言っという。」

「・・・うん。」

ジュエルシールドの方を見る。先ほど爆発的な魔力を放出した所為か先ほどよりは落ち着いているがまだ油断できない、早めに封印しないと・・・。

「なのは！大丈夫！？」

「フェイト、大丈夫かい！？」

声がしたので二人の方を見るとユーノとアルフが合流していた。それぞれ、状況を確認しているようだが、フェイトとなのはの顔が暗い。どうやらデバイスの心配をしているようだ。

ふとフェイトの方を見る。ちょうどバルディッシュを見つめていた。

「・・・っ・・・」

フェイトはバルディッシュの状態を確認して顔を歪めた。

「大丈夫・・・？戻ってバルディッシュ・・・」

<・・・yes・・・sir>

流れる音声にはノイズが混じっていた。

そんなバルディッシュを心配してフェイトは待機状態に戻した。

「・・・！！」

フェイトはジュエルシールドの方に駆け寄って行った。

「フェイト！？」

「あっ・・・！？」

そしてその小さな手でジュエルシールドを包み込み抑える。

「う・・・ううう・・・」

「フェイトダメだ！危ない！！」

アルフの言葉も聞かずに、足元に魔法陣を出現させ必死に抑え込む。

「まったく、無茶するよほんとに。」

「えっ!?!」

僕はフェイトの手からジュエルシールドを奪う。

「・・・暴れる力よ、猛き力よ、我が魔力を以って、再び静かな眠りにつかん。封印!」^{シーリング}

僕は封印魔法を再び掛けた。・・・よし上手くいった。ジュエルシールドはただの宝石のように静まった。

「う・・・うう・・・。」

「うわっ!」

フェイトが僕の方に倒れ込む、あわてて僕は支えたがお互い抱き合うような感じになってしまった。

「・・・!!」

なんか、なのはが赤くなっているのは無視する。

「フェイト!?!」

「・・・大丈夫、気を失ってるだけ。・・・たぶん魔力の使いすぎが原因。」

そう言ってアルフにフェイトを預ける。

「気が付いたら、無茶するなって伝えておいて。」

「あんたが言うな。」

「・・・自分も原因の一人だつて認識してる?」

「・・・うっ、・・・わかったよ。」

そう言いながら両腕でフェイトを抱える。僕はフェイトの手に封印したジュエルシールドを握らせた。

「・・・!!」

「あ・・・。」

「・・・。」

アルフはなのは達を睨みつけ、なのはは一步後退ったが、ユーノは睨み返した。

しばらく睨み合いが続いたが、アルフは踵を返しそのまま去って行った。

「……僕も帰るか。力使いすぎたから早く家に帰ろう。そう思い、帰ろうと歩を進めようとした。」

「待ってください。」

「……何？」

ユーノが呼びとめた。

「あなたからも色々話を聞きたいんですが。」

「……疲れたから今度にしてくれない？」

振り向かずそのまま答える。……どうやらユーノは、さっきジュエルシードをフェイトに渡したことが不満らしい。声からもわかる。

「それでも、です。あなたが何者かわからない訳ですし。」

「ユーノ君!？」

「なのは、この子は危険だよ。さっきの魔法も僕たちが使うものは違うし、もしかしたらあの子の仲間かもしれない。さっきジュエルシードを渡していたし。」

「……渡したことはとやかく言われたくないね。僕が封印しなくてもフェイトが封印していただろうし。」

「それは……」

「……まあ、別にいいけどね。ジュエルシード自体に興味はないし。」

「それなら……」

「ん?」

「なんで、……君は戦っているの?」

なのはがきいてきた。

「うーん……巻き込まれたから、かな。」

「え?」

僕はなのはの方を向きながら話す。

「僕はね、知らないところでこういうことがあったのなら、そのまま関わらないつもりだった。．．．でも今は、知ってしまったし、関わってしまったからね。だからこの馬鹿騒ぎを早く終わらせる。そうじゃないと僕にとぼっちりが来るからね。現にジュエルシードに襲われるわ、今回は知らず知らずのうちに結界の中に入り込んで巻き込まれるわ、更には封印しようとしたら横から誰かさん達が来て暴走させるし．．．」

「あはは．．．」

なのはを見ると何か気まずそうに目をそらされた。

「．．．ともかく僕は君たちを襲うことはしないし、ジュエルシードを奪ったりしない。それだけは言っておくよ。」
そう言っただけで帰ろうとした。

．．．あれ？なんかくらくらする．．．は．や．く．．．帰ら．．．
な．．．い．．．と．．．
僕の視界が真っ暗になった。

T o b e c o n t i n u e n e x t s t o r y .

次回予告

「JJJJ．．．JJJJ?」

目覚めたのは見知らぬ場所。

「大丈夫？」

そばにいたのは、白き魔法少女。

「そのジュエルシード渡してもらおうよ。」

再び起こる戦い。

「また厄介な・・・」

パワーアップするジュエルシード。

「時空管理局だ！...ここでの戦闘は危険すぎる!...」

現れる介入者。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書
第五話「時空管理局」

「・・・ビリビリ、いつとく？」

今回使用した他作品の魔法の説明

インブレイスエンド（テイルズオブデスティニー2より）

巨大な氷を落として敵にダメージを与える上級晶術。一応秘奥義も使えるが今回は必要がなかったので使わなかった。（今回はゲームと多少演出が違う）使うのはリアラ、ハロルド、ナナリーなど。

第4話「理由」（後書き）

後書き

ようやく第四話完成です。長く待たせてすみません！！思ったよりも時間がかかってしまったのは誤算でした。まだまだ未熟ですが他の作家さんの作品を参考にしつつ書いています。しかし他の作家さんは更新スピードも速いですねー。週1で更新とかすごいと思いますし、別のサイトになります。二日で一作品しかも相当なボリュームで書く作家さんもいますので見習ってがんばりたいと思います。さて次回の更新ですが、しばらくかかると思います。理由としては試験が近いので勉強の方に力をいれたいと思います。次回の更新は2月になるとおもいます。なのでそれまでまっけてくれるとうれしいです。

あと感想やリクエストなどもお待ちしております。

たまに活動報告も書いていますので、よければ見てください。

それでは次回まで、さよーならー！。

p・s お気に入り登録者数が40を超えました。ありがとうございます。ごぞい

第5話 「時空管理局」(前書き)

お久しぶりです。色々あって遅れましたがその分ボリュームは多少増えています。それでは第5話ご覧ください。

第5話 「時空管理局」

あらすじ

能力を使う訓練をしました

また巻き込まれなのにも遭遇しました。

封印した後倒れてしまいました。

「…………あれここ…………どこだ？確かジュエルシードの暴走に巻き込まれて…………その後封印して、帰ろうとしたら急に視界が真っ暗になって…………。」

周りを見渡す。僕がいつも寝ているワンルームの部屋とは違い、どこか女の子らしい部屋という印象だった。どこかに運ばれた？そう思っているとドアが開いた。

「あ、やっと気付いたね。おはよう。」

高町なのはとユーノが現れました。…………まじで？

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第5話 「時空管理局」

「…………ということは封印した後、僕はぶっ倒れてここに運ばれた…………。…………。…………てことでいいのかな。」

「はい。なのはのお兄さんと呼んでここまで運んでもらったんです。」

「いきなり倒れたからビックリしたよ。」

どうやら僕は今高町なのは家にいるらしい。・・・まさか倒れるなんてね、今まで無茶していたのが溜まったのかな？　いくら体がハイスペックと言ってもやはり子供。体力はそこまで高くはない。それに初めて使う高威力の魔法、突然のトラブル、無茶な転移、どれをとつても原因になりうるものばかりだ。そう考えていると下の階から声が聞こえてきた。

「なのは、御飯よ。」

「はい。・・・とりあえずご飯をたべよ？」

そういつて高町さんは僕の手をとって連れて行くとした。

「ちよつと待つて高町さん！さすがにそこまでお世話になるわけには・・・。」

「・・・なのは。」

「え？」

「・・・なのはって呼んでよ。」

「ん？」

「あの子のこと、フエイト、って、名前で呼んでるよね!？」

「う、うん・・・。」

なのはは僕の目の前に顔をぐいって近づけた。思わず僕は後ずさる。

「私に対しては名字で呼んであきらかに壁を作っているよね!？」

「い、いや壁を作っているわけじゃないんだけど・・・。」

ど、どうしよう。なんかいきなり興奮しているんだけど!？しかも威圧感もすごいし!というか何でそこまでむきになっているんだ?と、とにかく早くこれを切り抜けないと!!

「す、少し落ち着いてよ。」

「名前で呼んでくれれば済む話だよ？」

「い、いやあんまり慣れていなくて・・・。」

「でも、あの子は名前で呼んでいるよね？」

「う、うん・・・。」

「ふーん・・・。」

駄目だ!!これじゃ堂々巡りだ。しかたない・・・。

「ユーノ。」「えっ?」

「後は任せた。」

そう言つて僕は猛ダツシユで部屋を出た。どうやら脱出に成功したみたいだ。

「……やっぱり少しお話しする必要があるみたいだね。」
「ひいっ!」

ガタガタ震えるフェレットとデバイスがそこに残された。

……部屋から脱出した後、外の廊下でウイトレスさん（美由紀さんというらしい）に会った。聞くと高町なのはのお姉さんということらしい。僕はここまで運んできてくれたことなどのお礼言いたいと言つたら。

「恭ちゃんは、もうすぐこっちに来るはずだから……少し居間で待っててね。」

と言われ、居間で待ち、恭也さんと会った。こっちから運んでもらつたお礼を言つと、

「……気にするな。」

と言われたのだが、その時僕に殺気を向けられたのにはビビった。後から美由紀さんに聞くと、

「いや、ごめんね。恭ちゃん、なのはを君に盗られた感じがしてナ
ーバスになつていたから。」

「……どんだけシスコンなんですかあの人。」

「ははは……」

その後帰ろうとしたのだが、高町夫妻に「食べていきなさい。」と言われ断るにも気がひけたので頂くことにしたんだけど……。

「……ゴゴゴゴ……」

隣にいる高町なのはさんが怖いです!!なんか変なオーラ出してるし!

「……えっと……なのは?」

「……何?お姉ちゃん?……」

「ひっ！！な、なんでもないよ。」

あゝ美由紀さん、あれはそっとしておくべきですよ。と心の中で思いつつ他の人様子をうかがう。高町夫妻は・・・何あれ、あそこ周辺だけ桃色の新婚オーラが出ているですけど。無茶苦茶甘ったるいんですけど。・・・他のみんながスルーしているところ見るとどうやらいつものことらしい。ちなみに二人はなのはの暗黒オーラの影響を受けていない。そりゃそうだ、あそこまでの桃色新婚オーラを出してりや暗黒オーラもたじたじだよ。

美由紀さん達を見る、美由紀さんはなのはのオーラにビビってる。恭也さんは普通にパクパクご飯を食べている。僕みたいに触れないようにしていたのだろうか？

「・・・恭ちゃん、よくこんな状況でご飯が食べられるね。」

「？、何を言っている、いつもどりの食卓だろ？」

「・・・恭ちゃん、本当にそう思っているなら病院行った方がいいと思うよ？フィリス先生のところ、しばらく行ってないでしょ？」

「・・・別に体に問題あるわけじゃないし大丈夫だろ。」

違った。この人ただ単に鈍感なだけだ。思わずため息が出てしまう。さっきのシスコン殺気はどうした。自分の妹の変化にもう少し気を配れよ、と言いたい。

「・・・とはいえこのまま放って置くのもやばい気がする。何とかしないと。せつかくのご飯、味がしないというのももつたいない。・・・ま、原因は分かっているのが救いかな？と思いつつ行動に移す。・・・心がけるのはできるだけ自然を装うこと。」

「・・・なのは、醤油とって。」

「！！・・・うん！！」

はっとしてこっちを向いた後、満開の笑顔になった。それまで纏っていた黒いオーラはなくなつて、機嫌も良くなり、美由紀さんはほつとした顔になつて、高町夫妻はなんだか感心した顔をしていた。そのあとご飯をおいしく頂いた。・・・シスコンの殺気は気づかなかったことにおいたけどね！！

地獄からの生還を果たした食事が終わり、僕は帰ることにした。泊って行けと言われたが、さすがに断っておいた。高町夫妻は残念そうな顔をしていたが、用事があるということで納得してもらった。なのははとてもがっかりしていたけど。

あとなのはにジュエルシードを一個渡しておいた。看病してくれたお礼だ。それからなのは達と取り決めた。基本的には関わらず、やむ負えない時は回収をするが、悪用せずあずかって置くということ。もしなのはとフェイトが争うときは僕は中立の立場をとり、戦い中にジュエルシードを暴走させないようにすることなどだ。ユーノは初め不満そうにしていたが、全部回収を終え、きちんと運ぶ準備を終えた時にと返すと言うと納得してくれた。今渡しても誰かに盗られる可能性もあるしね。なのはは、手伝ってもらいたそうだったが、フェイトのこともあるし納得してもらった。

それで家に帰っているところなんだけど……、なんか見られている気がする。周りを見渡すがだれ一人いない。気のせいかと思い、再び歩き始めるがふと気付いた。

「……いくらなんでも静かすぎない？」

今歩いているのは住宅街なのだが、今の時間から考えるとまだみんな眠る時間じゃない。そして前にも感じたことのあるこの感覚……間違いない、僕はまた結界の中に閉じ込められたようだ。

「他の奴を巻き込まないために結界を張らせてもらったよ。」

声をする方向を見るとそこにはオレンジ色をした毛皮を持つオオカミ、アルフがいた。

「ジュエルシード、この付近にあるの？」

そう問いかけつつ僕はサーチを使い結界内にジュエルシードがあるか探った。しかし反応がない。

「ジュエルシードならあるじゃないか……あんたが持つてるやつがね……！」

「ちっ……！」

アルフがそう言ってオオカミ形態のまま襲いかかってきた。横に飛んで間一髪で何とか避けることができたが、まだ危機的状況は変わらない。

「いきなり攻撃するなんて危ないだろ!!」

「避けているから大丈夫だろ!!」そう言いつつ方向転換をし、再び襲いかかってきた。

「くそっ!!」

後ろに飛んで攻撃をかわし方向転換してそのまま走りだした。後ろからはアルフが追いかけてきている。

「・・・能力使用、空間移動能力者」

そう宣言した後、すぐに能力を使って100メートル先に転移した。しかしそれではアルフを撒けない。なので細かく転移をして攪乱していく。

「ちっ!!相変わらず厄介な技だね!!」

そう言いつつアルフは片っ端から転移したところへ突っ込んで攻撃をしてきた。それをかわしつつできるだけ逃げようとするが攻撃の間隔が短すぎてあまり遠くに転移ができない。

・・・そんな状況がしばらく続き互いに息が上がってきた。・・・おかしい。いくらなんでも妙だ。僕は前フェイトにも勝ったことあるし、アルフもぶっ飛ばした。ならば普通は警戒して攻撃も慎重になるし、一人では攻撃してこないはず。・・・さてよ。ならフェイトはどうした。アルフ単体での攻撃をフェイトが許可するはずがない。

「!!隙だらけだよ!!」

思考の海にとらわれかけた僕に対してアルフは人型に変身して蹴りをいれてきた。一瞬反応が遅れた僕は正面からガードをするが踏ん張りきれず飛ばされてしまう。何とか着地をして次のアルフの攻撃に備えるが攻撃をしてこなかった。その代わり笑っていた。

「ごめんね。」

「!!!!」

声がしたのは後ろから。急いで振り返ろうとするが体に何かが巻きつき動きを封じられた。

Side フェイト

私達の作戦はアルフを陽動に使った奇襲だった。まずアルフが攻撃を仕掛け彼に考えさせる余裕をなくさせ、疲れたところを私が攻撃するという作戦だ。本来だったら二人同時に攻撃を仕掛け連携で倒すのがベストなんだけど、私には今そんな体力がなく、一撃だせるかどうかの状態だったからアルフに負担をかける役目をさせてしまった。

「ごめんね。」

彼を拘束しているのはアルフの設置型のバインド。あらかじめ仕掛けておいたところにシュウを飛ばしたのだ。私は大鎌のバルディッシュをそのまま彼に振りかぶり攻撃した。彼が何かをつぶやいた瞬間目の前にバリアが展開され、バルディッシュの鎌の部分とぶつかる。バリアを壊そうとするが、体に力が入らず、それ以上押し込めない。その間にシュウはバインドを破壊してこっちを向いた、私を見てとても悲しそうな顔をした。

Side フェイトend

バインドで縛られた後僕は攻撃に備え、シールドを張った。しかし急ごしらえで作ったものなので耐久度があまりない。攻撃の緩衝材のつもりだったので、ある程度はしかたないと思っていた。張った瞬間に攻撃を受けた。しかしバリアは破れていない。おかしいと思いついて、バインドを無理やり魔力で破り、攻撃を受けた方向を見る。そこにはフェイトがいた。しかしおかしい。この程度のバリア、フェイトならすぐ破れるはずだ。しかしそれができていない、・・・フェイト自身に何か起こっている？表情を見ると何かを我慢しているようで、とてもつらそうだ。・・・たぶん、怪我している。それに気付いた瞬間、僕の目の前にいる少女はあまりに弱弱しく、とても

はかなく見えた。

(なんで、・・・なんで君はそこまでがんばるんだよ・・・)
彼女のことは原作で生い立ちとかは分かっていた。だけど実際に何
度も会ってみて、改めてわかる。この子は優しい子だ。誰かを傷つ
けようとすると子じゃない。さっきだって攻撃の時に「ごめんね」っ
て言ってた。絶対つらいはずだ、誰も傷つけたくないのに今こうし
て攻撃するしかないところまで追い詰められているのだから。

(関わり過ぎないように、と思っっていたんだけどな・・・)
僕はバリアを解除した支えがなくなった鎌は、僕に向かってくる。
横に一歩ずれるだけで僕はそれをかわす。鎌が地面に刺さる。フェ
イトの方はもう体力の限界だったのだろうそのまま動きを止めてし
まった。

「・・・よくそんな状態で攻撃できたね。」

「わ、わたし・・・」

「まった。その前に、・・・アルフ、質問があるんだけど。」

「・・・なんだい。」

「誰がフェイトをここまで痛めつけた？」

「！！気づいてたのかい!？」

「まあね、つと。とりあえず治療が先かな。フェイト後ろ向いて

「う、うん・・・。」

「それなら背中を見せて、怪我を直接見ないと治療できないし。」

「！！え、えつと・・・その・・・」

「あーそつか・・・。バルディッシュ、背中だけジャケット解除で
きる？前は隠したままで。」

『可能です。』

「じゃあそれをお願い。アルフは一応フェイトを前から抑えてて、
念のために痛みとかがあつて動いたらいけないし。」

「しかたない。・・・あんたを信用するよ。」

「おねがいします。」

「じゃあ始めようかな。バルディッシュ。」

『 yes sir 』

そう言つて僕は背中を見せてもらう。・・・ひどいなこれは。背中には無数の痣ができていて、所々みみずばれになっていた。

「まずは、・・・聖なる活力ここへ・・・ファーストエイド！」

そう言つて小規模の魔法陣を足元に出現させ、魔法を起動する。今回使うのはテイルズのポピュラーな回復魔法、ファーストエイド（ヴェスペディアver）である。文字通り応急処置である。これで様子見て駄目だったらナイチンゲールを使った方がいいかな？と考えていると、見る見るうちに傷が治っていく。・・・え？こんなに効果の高い魔法だったけ？

そうしている間にフェイトの背中は綺麗に治っていた。・・・ちょっと背中をひと撫でしてみる。

「ひゃうー！」

「あんだ何やつてるんだい！！」

アルフに怒られてしまった。

「・・・一応感覚があるかどうかの確認だよ。傷が治ってもそういう所で障害が出てきたりもするから。」正直子供なのにあんなエロい声が出るとは思ってもみなかったけど。

「とにかく、・・・フェイト、痛みとか、違和感はない？」

「うん、大丈夫だと思う。」顔が赤くなっているのは無視しておくう、うん。

「それじゃあ、さっきの質問の続きをしよう。フェイト、誰にやられた？」

「・・・。。。。ごめん。」

さっきまでの表情から一変、ふさぎこんだ感じになった。・・・確か児童虐待のケースで親をかばうとかいうやつがあったな。今回のフェイトはまさしくその例だ。

「・・・まあいいや、話したくなったらでいいよ。」

「え？」

フェイトはなんか拍子抜けしたようだ。こういうときは無理やり聞

き出すのではなくて、自分から話してくれるまで待つべきなのだ。
・ ・ ・たとえ答えがわかっていたとしても。

「とりあえずもう行くね？しばらくは休んでおくこと。怪我は治ったけど、体力や魔力はまだ不十分だから今戦闘とかしたらポロポロになるよ？」

「で、でも・・・」

「それでも駄目なの。アルフ、最悪の場合はくくりつけてでもいいからちゃんと止めてね？」

「あ、ああ・・・」

「あんまり無茶するなよ？じゃあね。」

「待って！」

「ん？」行こうとしたらいきなりフェイトに呼びとめられた。

「・・・ありがとう。」

「・・・ああ。どういたしまして。」

そう言っただけで僕は家への帰宅の途についた。色々あり過ぎて家にたどり着いた瞬間眠ってしまった。

あれから2日後、フェイトの方は全快したみたいでジュエルシードを集めている。なのはの方も順調に集めているらしい。あの戦い以降二人が戦った様子はないようだ。僕の方は積極的に集めてはいないし関わってはいない。もしかしたらこのままアニメ通りの展開になるかもしれない。そう考えていたのだけど・・・。

「・・・なぜここで出てくるんだよ、ジュエルシード。」

そう、また僕の前に、木に寄生して暴走しているジュエルシードが現れたのだ。・・・正直めんどい。しかもまだフェイトもものはも来ていないので僕が相手するしかない。・・・海浜公園に散歩しに来ただけなんだけどなあ・・・。

そんな僕の嘆きを無視して木が襲いかかってくる。

「やるしかないか・・・揺らめく焰、猛追。ファイアボール!!」

そう言っただけで僕は三つの火の玉を出し迫りくる木の枝にぶつけ、燃や

して迎撃した。

「もういつちよ。・・・揺らめく焔、猛追。ファイアボール!!」
再び詠唱し今度は5つの火の玉を出現させ、本体に向けて放つ。しかし、何かに阻まれ攻撃が届かなかった。

「バリアかよ、また厄介な・・・。」そう言ってもう一度詠唱をしようとするが伸びてきた木の枝に阻まれ、詠唱を阻止された。このままだとジリ貧になる、そう考えた僕は能力を使うことにした。

「能力使用、電撃使い（エレクトロマスター）!!」

そう言いつつ僕は雷撃の槍を放つ、しかしこれもバリアに阻まれダメージを与えることができない。これもだめか・・・そんなことを考えていた瞬間後ろから伸びてきた枝によって足をとられた。

「やばっ!!!!」

他の方向からも枝が伸びてきて両手両足を拘束される。・・・だったら!

「これで、どうだ!!」

その瞬間僕は思いつきり、僕を拘束する木の枝に対してありったけの電流を流した。そうするといきなり木の動きが止まり、僕への拘束が外れた。

植物には内部に栄養と水分を通す管みたいなものがある。その部分は電気が通る、それを僕は利用して、木全体に内部からダメージを与えることができたのだ。

「秀君!!」「シユウ!!」

上空を見るとなのは達が飛んできており、別の方向からはフェイト達も飛んできていた。

「今のうちにジュエルシードを攻撃するんだ!!」

僕が言った瞬間になのはとフェイトは木の中心部に向かって砲撃を打ち込んだ。ジュエルシードはバリアを張るが、先ほどのダメージの影響か簡単に突破され打ち抜かれた。

「・・・暴れる力よ、猛き力よ、我が魔力を以って、再び静かな眠りにつかん。封印!!」
シーリング

その瞬間を狙い、ジュエルシードを封印した。すると暴走していた木は消え、残ったのは僕の手元にあるジュエルシードになった。

「ふうー……二人とも遅すぎ……」

「にははは、……ごめん。」

「ちよつと離れていたところにいたから……」

「……まあいいや。ところでこれ、どうする?」

手に持っていたジュエルシードを見せた瞬間その場に緊張が走った。「この前みたいには暴走させないから、一対一で戦って勝った方に渡す。それでいいよね?」

そう問いかけると二人ともうなずいた。そして二人とも上空に浮かび準備をする。

「アルフとユーノは手を出すなよ?……それじゃあ……始め!」

宣言した瞬間二人がお互いに突っ込んでゆく。しかしいきなり二人の間に誰かが現れ、二人のデバイスを止めた。

「……そこまでだ!!ここでの戦闘は危険すぎる!」

あ、やばっ、こいつら(時空管理局)の存在忘れてた。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて「アクアスパイク!!」もらグボツ!!」

とりあえず空気を読まずに参上した奴に攻撃しておいた。この魔法は水の塊を相手にぶつける魔法で詠唱もなしで発動できる便利な魔法なのだ。クロノはぶっ飛ばされて海に落ちた。

みんなクロノが急にぶっ飛ばされてポカンとしている。……よし。「アルフとユーノは手を出すなよ?……それじゃあ……始め!」

「いやいやいや!?何なかったことにしてやり直そうとしてるんだい!?!」

「そつだよ!いきなり時空管理局の人攻撃をするなんてビックリしたよ!?!」

いきなりアルフとユーノから突っ込まれた。

「大丈夫だよ。きつと見えない力でなかったことになるから。」

「さすがにそれは無理だと思うよ……」

「にはははは……」

フェイトやなのはもあきれてるようだ。おかげで戦う雰囲気じゃなくなつたな。

「とりあえず僕がジュエルシールドを預かって置くとして……」

「聞き捨てならないな。」

いきなり地面から青い縄みたいのが伸びてきて僕を拘束する。それはフェイトやなのはも同様だ……今日はこの状態が多いな。

「いきなり拘束プレイとは、ずいぶん歪んだ性癖を持っているね。」

「誰がゆがんだ性癖だ!!君がいきなり攻撃してくるからだろうが!!」

そう言つて現れたのは黒のコートを身にまとつたようなバリアジアケツトきて大きめのワカメをかぶつたクロノだった。

「それでワカメ君はこれからどうするつもりかな？」

「ク・ロ・ノ・だ!!」

まあ、それは置いておくとして。

(フェイト、アルフどのくらいあれば抜け出せる?)

(30秒あればなんとか……)

(うん、わかつた。何とかするよ)

「君たちはいったい何の目的で戦闘行為をしていた？」

おつ、さつそく尋問か?フェイト達から注意をそらすために頑張りますか。

「言うと思う?君みたいな得体の知らない人に。」

「なに!?!」

「それに君は僕より年下に見えるからそんなこと言つても説得力がないし、怖くもない!!」

「僕はこれでも14歳だ!!」

「嘘だ!!そんな背の低い14歳なんて居る訳ない!!」

「嘘じゃない!!」

おいおいおい、こんなことで冷静さをなくすのはいただけいな。

「ま、それは置いて。・・・こんな拘束意味ないし。」

そう言つて僕の魔力を流し込みバインドをいとも簡単に壊す。

「なっ!!」

「僕はつか見てもいいの？複数の人拘束しているんだから。他の人にも注意しなきゃ。」

「!!!」

クロノがフェイト達の方を見るが、もうすでに逃げていたので誰もいなかった。なのはも驚いていたが無視しよう。

「だったら君たちだけでも、話を聞かせてもらおうか・・・」

「何？思いどろりにいかないから力づくでやるうとする気？・・・まったく最近の若者は・・・。」

「君に言われたくない!!」

『stinger sniper』

いきなり攻撃仕掛けてきた。青色の魔力弾、数は3。

「揺らめく焰、猛追。ファイアボール!!」

直線的な弾道だったので5つのファイアボールで迎撃する。3発は魔力弾を相殺して残り2発は、クロノに向かっていく。

「くっ!!」

クロノは空中を飛び、回避しようとするが、ファイアボールは追尾性能があるので、クロノを追いかける。

『stinger sniper』

新たに2発魔力弾を出し、ファイアボールを相殺した。・・・だけどまだ甘いよ。

「揺らめく焰、猛追。ファイアボール!!」

新たにファイアボールを生成、今度は8発を作りだし、クロノに襲いかかる。

「二度も同じ魔法は通用しない!!」

『blaze cannon』

クロノは僕とファイアボールが直線状に並ぶ所で砲撃魔法を撃つて

きた。砲撃魔法によってファイアボールはすべて打ち消され、僕に向かつてくる。

「甘い！スペルカード、夢符、二重結界！！」

懐からカードを取り出して地面に置く。その瞬間に僕の足元を中心に魔法陣が出現した。その魔法陣を囲むように金色の結界が発生してクロノの砲撃を易々と退ける。

これこそ僕が創造クリエイトによってマジックアイテムのうちの一つ「スペルカード」だ。これは東方という弾幕シューティングゲームに出てくる重要アイテムで（詳しくはググってね）この魔法を作り出した時に最初に作ったアイテムである。

これは白紙のカードに僕がイメージと魔力をあらかじめ練り込むことよって戦闘中、カードを使うことで瞬時に強力な魔法を使うことができ、消費魔力を減らすことができるという便利なアイテムだ。ただしこれには欠点があつて、準備に時間と手間がかかることやあまり多くの枚数は作ることができないということがある。まあここは訓練すればいいし、1枚1枚が強力なので戦況を簡単にひっくり返すことができるから、文字通り、強力な手札となりメリットの方が大きい。今回使ったのは博麗霊夢が使う防御系または近接系の技で、マスタースパークを防げるほどの防御力がある。

「くそっ！それなら！」

そう言つてクロノがこっちに向かつて飛んできた。どうやら接近戦に持ち込む作戦らしい。

「それなら、・・・アクアスパイク！！」

もう一発。クロノに向けて、水の壁を打ち出した。しかしクロノは避けようとはせずにそのまま突っ込み、直撃する。しかし寸前にシールドを張ることよって、ガードをした。そのままスピードを緩めずこっちに突っ込んでゆく。だけどそれは想定済みだ。

「フリーズハンター！！」

そう言うと、クロノの前方に複数の氷の槍が出現した。その氷の槍はクロノに向かつて突っ込んでゆく。

「なっ!？」

いきなり氷の槍が現れたことに驚いたがすぐに急上昇することによって回避できた。

「なんだよその君の魔法は!?!でたらめすぎるだろ!?!砲撃は簡単に防がれるし、いきなり氷の槍が出てきたときは死ぬかとおもったぞ!?!」

「そっちこそ!?!人のこと言えるか!?!」

砲撃が来たときは少しビビったぞ!

『blaze cannon』

クロノがまた砲撃を仕掛けてくる。僕はシールドを張った・・・しかし、砲撃は僕の前の地面に直撃した。その衝撃で土埃が舞い、周りが見えなくなった。

(まさかこれが狙いか!) たぶんクロノはこの隙に接近戦を仕掛け、僕を組み伏せるつもりだろう。僕は目をつぶって意識を集中させる。体から発する微弱な電波に集中させる。・・・!前から急速に何か接近してる!即座に電撃を前に放つ。ボンという音がした。おそらく魔力弾だろう。

カンツ!後ろから音がした。後ろを振り向くがなにもない。その瞬間先ほど魔力弾が飛んできた方向からクロノが突っ込んできた。

Side クロノ

僕は勝利を確信していた。土埃による煙幕、魔力弾によるフェイント、そこまでやれば倒せるだろう、そう思っていた。不本意だが、遠距離戦は分が悪いと感じていた。遠距離攻撃のバリエーション、バリアの防御力などを打ち破れる方法がなかった。でも接近戦ならバリアを張る前に攻撃してしまえばこっちの勝ちだ。煙幕の中に突っ込む。煙幕を抜けた時、彼は後ろを向いていた。チャンスだと思いい攻撃を仕掛けようとした。

「ビリビリ、いっとく?」

彼がそう言った瞬間、攻撃しかけた体に衝撃が走る。体全体が痺れ

る、動けない、何もできない。僕の体はそのまま膝をつきそのまま前に倒れる。そのまま意識を失った。

Side クロノ end

風が吹き、土埃がなくなつた。視界が開け、目の前の意識を失つて倒れたクロノの体を見降ろす。

土埃が発生した時僕はこと体から発する微弱な電波で周囲を警戒していた。この能力を使っている時僕は体から発する微弱な電磁波から人や物の接近または変化がわかるようになる。それによって見えないところからの攻撃にも対応できるのだ。彼は僕と戦う前に海に落ちていたことにより体が濡れていた。だから余計に電撃が効いた。本当だつたら、一発でかいのをぶつければいいのだが、あんまりやり過ぎてクロノが怪我したら、後々余計にめんどくさくなるのだから仕方ない。・・・ん、なのはがこつちに来た。どうやらクロノが気絶した時にバインドが消滅したようだ。

「大丈夫？怪我してない？」

「見てのとうり無傷だよ。彼も気絶してるだけだしね。」

そう言つてクロノの方を見る所々焦げて痙攣しているけど大丈夫なはず・・・だよな？

「とりあえず帰ろうか、こいつは放っておいても迎え来るだろうし。また別の奴が来たら厄介だしね。」

「・・・彼、時空管理局の人なんだけど・・・」

「僕は知らないものを信用しない主義だから。」

「さすがにそれは・・・」

「少し待ってもらえるかしら？」

いきなり女性の声が響いた。そして僕らの目の前にモニターが現れそこには翡翠の髪を持つ女性がそこにいた。

「今度は誰？」

「こんにちは、突然で申し訳ないけど少しお話してもよろしいかしら？私は時空管理局提督、アースラ艦長リンディ・ハラウンです。」

「……まずは、攻撃行為を行ったことをそこにいる息子に代わって謝罪します。いくらなんでも事情も聞かずに拘束するのはやり過ぎだと思えますから。』

「やっぱり巻き込まれたか……。しかしこの人見た目すごく若っ！とても息子がいるようには見えないな……。いや、よく考えたら桃子さんも似たようなものか。クロノの方を見ると転送魔法で回収されているのが見えた。」

『それでね、謝罪とお詫びを兼ねてあなた達を私達の船、アースラにご招待したいのだけれど良いかしら？』

やはりフェイト達が逃げたから僕となのは達から事情聴取するのが狙いだな。だったらノコノコ行くわけにはいかない。僕の魔法と色々調べられたくないし。

「お断りします。」

『……。理由を聞かせてもらえないかしら？』

「僕はまだあなた達を信用していませんし、謝罪するつもりならそっちから来るのが普通だと思います。それに僕となのは巻き込まれただけで元々は無関係の人間です。話ならそのフェレットに聞いてください。わざわざ知らないところに行くのは怖いですね。」

「……。そうね。確かに配慮が足りなかったわ。分かりました、私が直接そちらに向かいます。場所は何処が良いかしら？」

「では明日、この公園にお昼過ぎくらいでどうでしょうか？」

『分かりました。それでは明日のお昼過ぎに。』

そう言ってモニターが消えた。

「よかったのかな……。あんなふうに言って。」

「まだ信用できないからね。ニセモノの可能性もあったし、もうすぐ6時だしね。」

そういつて太陽の方を見る。夕日がもう海に沈もうとしていた。

「じゃあ暗くならないうちに帰ろうか。また明日会おう。」

「そうだね。じゃあまた明日。」

そう言ってお互い家に帰った。

家に着き、ご飯を食べたりしながら考える。これからどうするか・
・管理局に協力はやめた方がいいだろう。下手に魔法のデータなどを取られたりしたら後々厄介になる。Asで魔力を吸収されたりなどしたら、敵がチート化してしまう。そのまま管理局に就職とかになったら最悪だ。Striker'sまでに僕のデータなどからクローンとか作られる可能性だってある。そんなのは気分が悪い。管理局は絶対の正義ではないのだ。それが怖い。取りあえず時空管理局とは協力せず。決闘の時に出てくるようにして最終決戦に臨む。それがいいだろう。そうときまれば明日に備えて眠ろう。そのまま僕は眠りに就いた。

T o b e c o n t i n u e n e x t s t o r y .

次回予告

時空管理局、この組織が出てくることによって、物語はクライマックスへと近づき始める。そして少年はこの物語をどう彩っていくのだろうか……。それはまだ誰も知らない……。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第6話 「戦いの前奏曲」

「無茶するなよ、つてもつと念を押しとくべきだったね。」

今回新しく使った魔法

ファイアボール（テイルズオブヴェスペリアより）

テイルズではポピュラーな術のうちの一つ。複数の火の玉が敵に向

かって飛んでいく。実際には使った回数によって、出る弾の数も変わるのだが、チート機能によってそのところは無視している。一応使うとき多少リタの動きをしている。上級の術を使うときはクルクル回る？

ファーストエイド（テイルズオブヴェスペリアより）

これもテイルズではポピュラーな回復魔法。回復量は低く文字どうりの応急処置。なぜか超強力な回復魔法になってしまった。

アクアスパイク（テイルズオブデスティニー2より）

初級の水の晶術（魔法）。水を集めて敵にぶつけるといったもの。詠唱いらずで発動できるが威力は控えめ。

フリーズハンター（テイルズオブデスティニー2より）

アクアスパイクの追加晶術。アクアスパイクが当たった相手に追い打ちとして攻撃できる術。複数の氷の矢が敵を貫いていく。

二重結界（東方より）

博麗霊夢が使う技。スペルカードによって発動される防御系の技。発動すると、金色の結界が出現し敵の攻撃（弹幕）を防ぎ、また近接の技としても利用できる。この技を使ったきっかけは、ニコ動にある霊夢と魔理沙の弹幕ごっこ動画を見たから。スペルカードはほかの種類も作っている。

第5話 「時空管理局」(後書き)

後書き

お久しぶりですシユウキです。約2か月ぶりの投稿、まことに遅れてすみません。これからは、もう少し早く更新できるように頑張りたいと思います。あと、この作品をいれてほしいなどのリクエストも受け付けていますので、どしどし感想とともに送ってください。

P s いつの間にかお気に入り登録者が90を超えていました。登録してくれた人、見てくれた人に感謝です。

第6話 「戦いの前奏曲」(前書き)

ようやく私は帰って来た　――！！！！
では第6話どうぞ――！！

第6話 「戦いの前奏曲」

あらすじ

なのはの家に運ばれ晩御飯を頂きました。

フェイトと再び戦い、怪我の治療をしました。

ジュエルシードの暴走に再び巻き込まれ、なのはとフェイト達と一緒に封印しました。

いきなり出てきたクロノをビリビリしました。

リンディさんと話して翌日会うことにしました。

Side アースラ

「クロノ君がまさか子供にあそこまでやられるとはね。」

「エイミィ、君まで言わないでくれないか……。」

クロノは回収された後に意識を取り戻した。戦闘のことで聞くと、「いきなり衝撃が走って意識が飛んだ。」

と説明された。船医が診察したところによると、スタンガンみたいな電気によって気絶させられたのでは、という話だったし……まあ、クロノにとっては屈辱的でしょうね。自分より年下の子にあそこまでやられるのは。

「……エイミィ、あの子が使っていた魔法陣解析できたかしら？」

「それがあまり……、魔力量などはずば抜けているのは、わかっているのですが……あの魔法陣ミッドに現存する魔法に一致しないんです。」

「何？三つともか？」

「うん。」

「そう言えば、この世界って管理外世界だったけど、魔法が認知されてきたな、3年前の開門で。」

「そっか！だったら向こうの関係者かも……」

「それはないわね。」

二人とも私の方に向いた。

「今は門が安定してないからあまりこっちの方には移住してないし、あの子、神族、魔族の特徴に当てはまらないわ。」

「だったら、あいつは何者だって言うんですか？」

「それはわからないわ。今考えても推測しかできないし。話してわかることもあるでしょう。」

そう言って先ほどの映像を見る。……あまり気分は良くないわね、こんな子供たちが戦っているのは。しかしそれを利用しようと考えてる私にもイライラしてしまう。本当だったらまだ、遊んだり甘えたりしたい年頃でしょうに……。大人の事情にあまり巻き込まれないのだけど……。

Side アースラ end

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第6話 「戦いの前奏曲」

翌日

「マジですか？」

思わずそう呟いてしまう。なんで、なんで・・・神王と魔王がテレビに映っているんですかー！！こっつてリリカルの世界だよな！？SHUFFLE！の世界じゃないよね！？

テレビの情報から、映像は3年前の開門の時の会見を映したものだとなかった。しかも調べてみると、光陽町は海鳴の隣であり家からも近かったのは驚いた。まだ神族、魔族でも移住している人はまだ少なく、移住先も光陽町が多いので、ここ海鳴ではあまり見かけないので今まで気づかなかった要因になった。

あの女神・・・とんでもない世界に送ったな・・・。あれ？あの話って開門してから何年たった時の話だったわけ？・・・思い出せない。まあ何とかなるか。あれって危険な目に会うことってなかっただろうし、稟が主人公だからこっちにとばかりは無いだろうし。とりあえずそのことに関してはひとまず置いておくことにした。関係ないしね。

約束の時刻に公園に行くとするのは達が来ていた。リンディさん達はまだ来ていないようだ。

「やあ、君たちが1番乗りのようだね。」

「あ、秀君。」

そう言っただけなのは話しかけ、そばまで近づいた。

「どうゆうふうに話します？」

「まず、ジュエルシードを集める経緯とかは、ユーノが説明して。たぶんそれが一番手っ取り早いから。その後なのはと僕にも話を聞くだらうから、そのまま説明するって感じかな。・・・一応聞いておくけど、あの人たち偽者じゃないよね？」

「それは確認しています。実際に管理局の職員みたいですから。まあ、本物って分かっているけどね。」

「みんなもう集まっているようね。」
話していると、声をかけられた。どうやらリンディさん達が来たようだ。

今この場には、僕、なのは、リンディさん、エイミー、そしてボロボロとなった人間・・・ユーノとクロノがそこにいた。実は、ユーノが人間に戻った際、ひと悶着あって落ち着こうとしていたときに僕が、

「ユーノ、きみお風呂はどうしてたの？」
と聞いた時に、

「なのは、お姉さんに入れられたんだよ・・・ハッ!!」
ユーノが後ろを振り向くとそこにはすでにセットアップした、魔王なのはがいた。どうやら同世代の男の子に裸を見られたことが嫌だったらしい。ユーノはバインドをかけられ、特大のディバインバスターをくらってこうなった。クロノはその巻き添えを食らった。僕とリンディさん達はすでに避難していた。しかしリンディさん、あんたエイミーさんは助けても、自分の息子はわざと見捨てたな。まあ、非殺傷設定みただったし（傍から見ると、そうは見えないが）おもちゃにして楽しんでるように思えた。・・・桃子さんと気が合いそうだな。後、ユーノ。僕は謝らないぞ。

その後、ユーノ達の回復を待つてから事情説明した。
リンディさんは

「立派なことだわ。」と褒めたがクロノからは
「だが同時に無謀でもある。」と言われた。

そのあと
「これより、ロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「君達は今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って元通りの生

活に戻ると良い。」

みたいな流れになる。

なのは達は食い下がろうとしても、

「次元干渉に関わる事件なんだ。民間人の出る話しじゃない。」

と言われ取りつく島もなかった。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もできないでしょう？一度家に帰って、今晚二人で話し合うといいわ。その上で、改めてお話ししましょう。」とリンディさんが言った。

「・・・あれ？おかしくないか？さつきクロノが『民間人の出る話しやない。』と言ったばかりなのに、なんで二人が話し合う必要がある？原作を見てた時には感じなかったけど、今この場で同じセリフを言われるとおかしい。・・・少し探りを入れた方がいいかな？

「よかつたじゃん、面倒事が一つ減って。ユーノ、なのはジュエルシードはこの人たちに任せて、あの子を探そうか。」

驚いたようにみんなこつちを向く。・・・リンディさんやクロノまで驚いてる。これは予想外だったんだな。

「さて、あの子ってまさか、あの時逃げた少女のことか？」

クロノがこつちに聞いてきた。

「うん、そうだけど。」

「駄目だ。あの子は重要参考人だから、我々にまかせて「関係ないね。」・・・なに？」

「僕達はジュエルシードに関わるなといわれた。だから僕たちが誰に会おうと勝手だよ。」

「そんなのはただの詭弁だ!!」

「詭弁を使っているのはどっちだい？」

「なっ!？」

「さつき君は言ってたよね？『民間人は出る話しじゃない』って。でもその後リンディさんは『今晚二人で話し合って、改めて話をしよう』は明らかに矛盾してない？」

自分の中で沸き立つ怒りを抑えながら喋ろうとするが少し強く言っ

てしまう。だけど許せない。人手不足だからといって子供まで利用しようとするのは許されたことじゃない。

「初めから気に入らなかつたよ。いきなり出てきては、巻きこまれた僕達に対しては何の言葉もないし、こちらに危機感を煽るようなことを言っておいて自ずから協力したいと言いだすように仕向けるなんて。なのは達は協力したいって言うだろうけどさ。明らかに大人がするようなことじゃないだろ!!」

「!!」

「だから僕はあなた達とはもう話したくはない。そんな風に協力してもらおうとする人達とはね。」

そう言つて振り向いて帰ろうとする。なのは達には（約束は守る）と念話しているので大丈夫だと思うが・・・

「待って！」

リンディさんに止められた。振り向くとその顔は複雑そうな感情が出ていた。

「ごめんなさい。私の立場ではこちらから協力を要請する訳がいかないとはいえ、誘導をしたのはあなたの言う通り大人のすることじやなかつたわ。」

そして頭を下げた。

「艦長!？」

クロノもエイミイも慌てている。大人が子供に頭を下げているのを見るのは動揺するだろうし。

「だけどこのままじゃもつと大規模な事件になってしまう。それだけは何としても阻止したい。でも今の戦力じゃ足りないわ・・・だから私達に協力してくれませんか？」

・・・この人は良くできた人だ。子供相手に頭を下げるなんてそうのできるんじゃない・・・でも

「・・・リンディさんは信用できる人だと思う。だけど僕はあなた達時空管理局は信じられない。だから一緒に行動はできません。」
そう一言告げて僕はその場から離れた。

それから数日は落ち着いた日々を過ごしていた。なのは達はどうかやらリンデイさん達と協力しているようで、あれからなのはとフェイトが衝突もしていないようだ。だから介入の必要もなくのんびり過ごしていた。一応準備はしてあるけどね。

今日は散歩と調査を兼ねて光陽町まで来たんだけど……。

「確かに海鳴よりは神族や魔族が多いな……」
「とりあえず、今はふらふら歩いている。」

調べた結果、Shuffleの舞台となったバーベナ学園はまだ存在してなかったのだ、少なくとも今はまだ原作よりも前の時間軸のようだ。あの女神一体どういうつもりだよ……。そんなことを考えながら歩いていたのがいけなかった、次の瞬間
ドーン！

「うわっ!?!」「キャッツ!?!」

曲がり角でぶつかってしまった。思わず尻もちをついてしまう。

ヒュー……ベチャ

うわ、なんか頭に降ってきた。頭を触ると、透明な粘々したものが手に付いていた。

(あーこれ卵だな。今日は本当についてないな。)

「はあ、不幸だ。」

思わず、某フラグ男のセリフを口にしてしまう。

「ごめんね。大丈夫?」

少し間延びした声がした方向を見ると。中学生か高校生くらいなの、女の人がいた。茶色のショートカットで猫耳みたいな形で赤いボンが付いた帽子をかぶっていた、かわいい人だった。

「いえ、大丈夫です。家に帰って着替えますから……。」

「でも今のままで気持ち悪いよ?……そっだ!ボクの家に来ない?家近いし、そこで着替えちゃおう。」

「いや、そこまでしてもらったらすすがに悪いですし・・・」
「子供が遠慮しちゃだめだよ？というわけであつて。」
「えー!?!」

僕が関わる人はなんか押しが強い人が多いな・・・。

というわけで

「ちよつとまっててね、あーちゃんの服ならサイズちょうどいいから。」

と言われ着替えると。

「あー・・・?」

「どうしたの?」

「どうして僕、スカートはいているのでしょうか?」

「ボクが似会うとおもったからだよ。」

「ちよつと待ってください、服の着替えて上着だけで十分ですよ!?!」

「うん、よく似合ってたかわいいよ。」

「いや、話ずれてるし。」

なぜか緑のスカートをはかされてます・・・マジかよ。

「おかーさん、この子がかわいいね!」

「かわいいって、すごいシヨックなんだけど・・・。」

その家には緑色の髪の女の子がいた。僕はいまその子の服を着ているという状況である。

「ねえ、名前はなんて言うの?」

落ち込んでいるところに、女の子から名前を聞かれた。

「・・・天河秀。君は?」

「ボクは時雨亜沙だよ。」

あれ?今どこかで聞いたことがあるような名前が聞こえたような?

「ボクは、そのお母さんの時雨亜麻です。」

「え?・・・。」

今何て言った?お母さん?

「お姉さんじゃなくて?」

「うん、あーちゃんのママだよ。」

「えー!!!???」

耐性があるとはいえ、これは驚くしかない。見た目中学生にしか見えないぞ、おい。

少しして何とか落ち着きを取り戻した後、二人と少し話した。その中で僕は彼女達は、Shuffleの登場人物であることを思い出した。・・・てか、名前聞いた時点で思い出そうよ、僕。あと、亜麻さんからは、しーちゃん。亜沙ちゃんからは秀ちゃんと呼ばれることとなった。・・・ちゃん付けに少し落ち込んだのは秘密である。どんなふうに話していたかというと、

「秀ちゃん、ほんとにどこから見てもかわいい女の子だね。・・・ちよっと自信なくすかも。」

「・・・いやいやいや、そういうこと言わないでよ・・・余計僕が落ち込むから。」

「うーん、薄めに化粧してみてもおもしろいかな」

「これ以上何をする気ですか!？」

こんな感じでツッコミ役やってます、はい。服の方はズボンも含めて洗濯しているので乾燥するまで待つしかありません。ちなみに今の服装は、薄い緑色で青のアクセントの付いた長袖に、緑のスカートをはいている状態です。・・・言ってる落ち込むよ・・・。ちなみに後日、亜麻さんが僕のこの格好が写真を撮っていたのを知るのは別の話である。

そんなことがあった数日後。

「おいおいおい、なんだあれは・・・」

目の前では竜巻が6つほど暴れまわっていた。

いきなり高魔力反応が海で発生したため、急いで海浜公園まで来てみるとジュエルシールドが暴走していた。僕が着いた時にはもうすでにフェイトがいたのだが、

「あのバカ！無茶してるじゃないか!？」

もうすでにフラフラで、アルフにつかまってジュエルシールドからの攻撃を何とか避けている状態だった。確かにテレビではそういう感じだったのをかすかに覚えているが、目の前で起きているのとは比べるとはるかに規模が小さかったはずだ。

(原因究明はあと！今はフェイトを助ける!!！)

S i d e フェイト

このままじゃだめかもしれない、そう私は思い始めていた。私に残っている魔力も少ないし、アルフも私をかばいながら戦ってくれているが、もう限界に近い。

最初は何とかなできる、そう思っていた。ジュエルシールドをまとめて発動させ、それを全部回収するのはアルフと二人なら可能の範囲。そう考えてジュエルシールドを暴走させたのだけど予想以上に、ジュエルシールドの魔力が高すぎて、私たちでは封印できない状態になってしまっていた。原因は分からない。だから一回引こうとしたけど6つのジュエルシールドによる竜巻によって逃げられない状態になってしまった。

今はアルフが頑張ってくれているのだけど、疲れの色は消えない。

「フェイト、まだあきらめちゃだめだよ。最低でも、フェイトだけでも逃がすから……。」

「!？アルフ……。」

そんな私の心情を精神リンクによって感じ取ったのだろう。アルフが励ましてくれた。

それで私達は気がゆるんでしまった。竜巻の一つから青い電撃が私達に向かってきた。しまった、一瞬避けるタイミングが遅れた！

「もう…だめ！」

目をつぶってこれから来るであろう衝撃に備えようとした。その一瞬私はシユウの顔が思い浮かんで、ごめん、ともう会えないことを心の中で謝った。

「…あれ？攻撃が…こない？代わりに地面の感触があった。」

「まったく、勝手に無茶して、勝手にあきらめるなよ。…無茶することに関しては自分自身、あんまり人に言える立場ではないけど。」

「えっ…」

聞こえたのはここにいるはずない人の声、

「…無茶するなよ、つてもつと念を押ししておくべきだったね。」

真っ先に思い浮かんだ男の子。

「まあ、それでも間に合ったからよしとするべきかな。」

その後ろ姿は小さいけど、どんな英雄よりもかっこよく見えた。

「さあ、とつと早く終わらせて、ケーキでも食べに行こう。」

その時見せた笑顔は、ずっと忘れられない。そんな風な笑顔だった。

Side フェイトend

フエイト達を何とか助けることができた。今回使ったのは空間移動テレポーターではなく、座標移動4↑プロポイントである。空間移動では自分の触れたものしか移動できない。しかし、座標移動の能力は触れずとも対象を移動させることができる能力である。

フエイト達の無事を確認した後、改めて竜巻を見る。・・・どうやら6つのジュエルシードが干渉しあって力を増しているようだ。僕の予想ではこの世界が原因でもありそうだけど。

「フエイトちゃん!!」

「お、思ったよりも遅かったね。」

「秀君!？」

なのは達も駆けつけてきた。もう少し早く来るかと思っていたけど。

「少し出るときにもめてしまつて・・・」

「あゝ何となくわかつた。」

おおかたクロノとかが止めたのだろう。確か勝手に自滅させてから対処するって考え方だったはずだが、その判断は間違いだと思う。

原作通りならそれでもいいんだろうけど、今のジュエルシードの暴走は異常だ。早く取りかからないと一般人にも被害が出かねないし。

「話しているところすまないが早いとこ対処しないか。」

「来るのが遅いよ。せめてあの異常な暴走の原因くらいは解析できているよね?」

ようやく来たか、クロノ。

「ふん、言われなくともやっているさ。ジュエルシードが互いに干渉しあって力が増しているようだな。」

「50点、それだけじゃない。あくまで予想だけど、門のせいだと思ふ。神界、魔界それぞれから魔力が流れてきてそれを吸収して力が増している、あたりかな?」

そう言つて海の方を見る。・・・さらに力が増しているよう見える。そろそろ何とかしないとイケないみたいだね。

「・・・今エイミーから連絡があつた。君の予測が正しいようだ。」

「対処法は？」

「砲撃魔法を打ち込み、干渉を打ち消してから封印作業を行うが今この場でできる対処法のような。6つまとめては不可能だから一つずつ行う。」

「それじゃ間に合わない。町の方にまで被害が来るよ。」

「だったら、どうするって言うんだ!？」

「簡単だよ、僕がちよっと本気出す。それでなんとかする。・・・少し離れてて。今からするから。」

「不可能だ!そんなの魔力が足りないに決まってる!」

「いいから黙ってて。もし暇があるなら余波がいかないように結界を張っとくか何なりして。」

そう言つて会話を打ち切る。そして目をつぶり集中し、言葉を紡ぐ。

「黄昏よりも暗き存在もの・・・」

自分の周囲に魔力が集まるのがわかる。

「血の流れよりも紅き存在もの・・・」

魔力の流れを僕を中心に集める。

「時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において・・・」

魔力を凝縮し形にしていく。

「我今ここに闇に誓わん、・・・」

そのまま血のように紅い魔力の塊を大きくしていく。

「我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに・・・」

狙いはジュエルシード、一発で終わらせる！

「我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを！ドラグ・スレイブ
！！」

紅い閃光が放たれた。自身が放った巨大な魔力によって、モーゼのように海が割れていく。そのまま竜巻の一つに直撃し、光が強くなる。その瞬間爆発、他のジュエルシードを巻き込む。

一拍遅れて爆風が来た。

飛ばされそうになるのを堪えようと思わず目をふさいでしまう。少し経ち風が弱まる。竜巻の方を確認すると、そこには、6つのジュエルシードが浮かんでいた。

Side クロノ

なんだあのバカ魔力は！！いくらなんでもデタラメすぎる。

前もって町の方には緊急の結界を張らせたが全ては抑えきれなかった。それも余波だけでだ。即席で張ったとはいえ結界の強度として

はAランクの砲撃にも耐えられるはずなのだがそれをいとも簡単に破られてはお手上げだ。

町にいる一般人には強い風が吹いたと感じるだろう、しかし魔族や神族などには風にまぎれた魔力を感じ取れる人もいる。・・・いやもうすでに把握している可能性が高い。後々魔王、神王などにも事情説明などしなければならぬ状況にもなることが簡単に想像できた。

胃が痛くなりつつもジュエルシードの回収をしようとするが、

「さて、このジュエルシードはどうしよう?」

なんて言った今?

そう言った本人を見るとその手には海上にあつたはずのジュエルシードが握られており、彼の非常識さにまた頭を抱えてしまった。

Sideクロノend

↑ポイント
座標移動によつてジュエルシードを手元に移動させ、封印処理を行った。クロノは一瞬で封印処理を行ったことに驚いているようだったが、それは無視した。前に暴走した時は詠唱してから封印処理を行っているけど、もともと詠唱とは術をより正確に実行するために行い、効果を上昇させるために行うという意味もある。しかもつと簡単に効果を上昇させるには、込める魔力を増やせば済む話であるので今回はそれを使わせてもらった。まあ、その分余計に魔力は消費するけどね。

問題はこの後、このジュエルシードをどうするかだ。もう手元にあるジュエルシードを含め、すべて集めたことになる。なのは、フェイトはそれをすべて集めなければならない。ということは必然的に取り合いになってしまうわけだ。ならば、なのはとフェイトが全てのジュエルシードを賭け決闘するのが一番だ。原作ではそんな流れだったしね。

そんなことを考えながら、二人の様子を見る。なのはがフェイトに

対して何かを言おうとしているところだった。

「・・・友達に、なりたいんだ・・・」

その言葉にフェイトは動揺している。たぶんその言葉は彼女にとって初めて言われたのだらう。どう返していいかわからなくて戸惑っているように見えた。

(なのははフェイトに対して思いをぶつけている。フェイトも少し戸惑っているけど思いにこたえようとしている。だから・・・邪魔はさせない!!)

その瞬間なのは達に向かって悪意が牙をむいた。何も無い空間からいきなり二人に向かって雷、いや電撃が襲いかかってきた。

即座に二人を対象とした防御魔法を展開、なんとか防げた。

「母さん!?!」

フェイトがそう叫ぶのが聞こえた。魔力反応!? もう一発来る。狙いは僕か!

「スペルカード、夢符、二重結界!!」

2発目の攻撃が来た。雷撃は結界に直撃し衝撃が走る。しかし結界はひびすら入らなかった。

「フェイト!!」

とっさに僕はフェイトを呼ぶ。その声にフェイトはこっちを向いたのでとっさにジュエルシールドを3つ投げた。(ありがとう)(すまない)

受け取った時に念話があった。そのままフェイト達は、転送魔法によって逃走した。

「なんであんなことした!!」

「なんでって、ジュエルシールドを渡したこと?」

「そつだ!!」

「彼女の為だ。考えてみなよ、味方ごと攻撃するよなやつのこと」

るに手ぶらのまま帰ってみろ、どうなるかすぐにわかるだろ？」

「それもそうだが・・・」

「だったらこの話はもう終わり。・・・それよりも、どこから攻撃してきたかわかった？そうすれば黒幕のところのすぐにも踏み込めるはずだろ？」

「・・・あの後、アースラに攻撃があつて、機能が一時的に停止した。そのせいで攻撃してきた魔法の逆探知もできなかった。彼女たちの転送先も同じだ・・・」

「・・・役立たず。」

「なに！？」

フェイトが撤退した後、いきなりクロノに詰め寄られた。どうやらさつき僕がとつた行動が気に入らなかつたらしい。

適当にあしらいつつ、これからのことを考える。これから残っている主なイベントはなのはとフェイトの決闘、そして時の庭園での最終決戦だったはずだ。決闘はプレセアからの介入を防げばいい。時の庭園へは一応乗り込んでおいたほうがいいたろう、主にイレギユラー対策として。

(でもあんまり介入しすぎないようにしないと後々洒落にならなくなるから気をつけよう。管理局で働くなんて言語道断だしね。・・・今はこいつを静かにさせるか。)

どうやって黙らせるか考えながら、今もまだ騒いでいるクロノ見つつため息を吐いたのだった。

Side ????

ここはとあるキッチン、一人の男が鼻歌を歌いながら料理を作っていた。

「~~~~~」

その手際はなれたものであり、知らない人が見れば一流の料理人が

料理しているのにはしか見えないだろう。端正な顔立ちと霧囲気の大
人だが長く尖った耳は彼が人間でないことを示していた。

魔族、それが彼の種族である。

「まー坊!!」

料理をしていた時声がした。男が振り返るとそこには和服に身を包
んではいるが、それが見事に似会っていない筋肉質の大男がそこに
いた。魔族ほどでないにしろ人間よりも長い耳、そして明るめの霧
囲気をもっていた。

神族、一般的にはそうよばれる。

「なんだい神ちゃん？あつそうそう今ご飯を作っているとところだか
ら一緒に食べるかい？」

「そいつはありがてえ〜って今はそんな話している場合じゃねえ！
そう言つて懐から一枚の紙を見せた。それを見た魔族の男は、さつ
きまでの霧囲気が一瞬で吹き飛んだ。

「・・・これは本当かい？」

「ああ、まちがいねえ。人間界の方で大規模な魔法が使われたらし
い。幸い被害はなく、強い風が吹いたくらいだったそうだ。恐ろし
く魔力を含んだ、な。」

「ふむ、・・・今人間界では『管理局』とかいう組織が動いてるみ
たいけど・・・そっちの方からは何か連絡はあったのかい？」

「自分たちの力で解決するから大丈夫だの一点張りだ。心配はない
から関わるなど。」

「もう一つの方は？」

「どうやら独自に調査隊を出したらしい。」

「この魔力反応は無視できないしね・・・。神ちゃん、一回人間界
に行こうか。こっちの観測部隊の人たちじゃ心もとないし。」

「そうだな・・・下手したらこっちの世界にも関わることだ。善は
急げ、早速いくか。」

「・・・お二人ともどちらに向かわれるのですか？」

後ろからの声によって二人は固まった。錆びついた機械のようにギ

ギギと動かすとメイド服を着た女性がいた。

「えっと・・・どうしたんだいママ、なにか・・・用でもあるのかい？」

「ま・お・う・さ・ま。もしかして今から人間界に行かれるつもりですか？」

「き、緊急の案件が出てきたからね、すぐに向かわないといけないんだ。」

「それならすでにバークさんが手配しておきましたから大丈夫ですよ？・・・それよりなんでお城で仕事をせず、厨房でお料理していたわけを伺いたいのですが・・・？」

「そ、それは・・・その気分転換というか・・・。」

魔王は思わず後ずさりした。目の前の女性から怒っていますよオーラが出ているのでたじたじだ。

「平日の家事は私がするというおやくそくでしたよね・・・？また先日人間界に行った時ナンパされていたことについてもお話ししないといけませんね？」

魔王の顔は青ざめ汗がたらたらと流していた。神王も思わず引いている。

「ま、まー坊がいけないなら仕方ないな。俺一人だけでも行くとしてよう。」

「！？ひどいよ神ちゃん！見捨てる気かい！？」

「お待ちください神王さま。」

その言葉によつて神王は体の動きが止まった。

「リア様から伝言がありました、仕事を投げ出してまで人間界に行くようでしたらお置きしてくれと仰せつかっております。」

その言葉で神王の顔も青ざめた。

「なので、今からお置きさせていただきますね・・・？疾風迅雷！！スピニングサンダーキック！！！！！！！！！！」

「うぎゃーーーーー！！！！！！！！！！」

二人揃って飛んで行った。この二人こそ神王ユーストマ、魔王フォ

「ベシイなのであるのだが女性には頭が上がらないのはどこでも一緒なのであった。」

Side 神王&魔王 end

Side とある一室

「それで、例の報告は？」

部屋には二人の男がいた。一人はイスに座り話を聞くおじいさん。

もう一人はその前に立つメガネをかけたダンディなおじさんがいた。

「はい。影響の方は強風が吹いたのみで被害はありません。魔力量のほうはマスタークラスの人間が束になって敵うかどうかの量が検出されました。」

「まさに化物じゃな。」

「ええ、そうですね。後時空管理局という団体も関わっていることがわかりました。」

「ふむ、始めて聞く団体じゃな。」

「どうやら地球以外のところから来たらしく、地球軌道上に戦艦らしきものが観測されました。彼らはデバイスといった機械で補助をしてもらいながら魔法を使っているらしいです。」

「その目的は？」

「海鳴町に落ちたマジックアイテムらしきものの回収ですね。今のところ侵略とかの悪用をする様子がないので監視にとどめています。そのマジックアイテム自体この間の件ですべて回収したようですが。」

「ふむ。術者と魔法についてはどうじゃ？時空管理局とか言う団体の使ったものじゃったら警戒せねばならんがのう。」

「それについてはまだ判りません。現時点で分かったことは、どの術式にも当てはまらないことくらいですね。そのほかのことはまだ分かっていません。」

「ならば、監視をもう少し強化してくれ。神界、魔界には情報の提供を求めてくれ。それと平行に術者の割り出しを早急に」

「わかりました。」

「それとタカミチ君、おぬしには海鳴町での調査に行ってもらってよいかのう？もしかしたら術者が居るかもしれないし。」

「もし発見できた場合はどうしますか？学園長。」

「可能ならばこちらに連れてきてくれ。どうやらエヴァが興味津津だでのう。一応長期の出張という扱いにしておく。」

「その後の処遇は？」

「できればわたちに協力してくればうれしいのじゃが・・・後々考えるところかのう。」

「では今から準備します。」そう言って男は部屋から出て行った。

一人残された老人は伸びをしながら、

「さて、これから忙しくなるのう。」

と一人つぶやいていた。

Side とある一室 end

少年の知らぬ所で物語は進んでいる。その物語と交差するのはまだ後の話。

To be continue next story .

次回予告

ついに物語はクライマックスへと加速する。フェイトとなのはの決闘、そして黒幕の目的もついに判明！

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第7話「決闘、そして宣言。」

「今から行く、あんたのそのくだらない幻想をぶち殺すために！！」

今回使った魔法の解説

ムーブポイント
座標移動とある魔術の禁書目録より

むすじめ 結標 あわき 淡希の使っている能力。直接物体に触れずとも物質を転移さ

せることができる上、距離は800m以上、重量は最大4.52t
(ただし1t以上は身体に悪影響が出る)を転移可能と空間移動系
統でもトップクラスの能力。

ドラグ・スレイブ
竜破斬 スレイヤーズより

赤眼の魔王の力を借りる呪文。赤光が伸びて着弾した目標の精神を破壊し、余剰エネルギーが爆発する。目標が生物でない場合はそのまま破壊力が具現する。人間が使える呪文のなかでもっとも高い攻撃力を持ち、小さな街一つを消し飛ばすほどの威力があり攻撃範囲も広い。この術を使える魔道士を数人抱えている国は外交上大きな顔が出来るという。約1000年前レイ＝マグナスが1600歳のアーク・ドラゴン雷銀竜を倒したことからこの名前がついたとされているが、実際は竜用が開発され最初からドラグ・スレイブ竜破斬という名前だった。習得するには人としては最大級の魔力容量を必要とする。

リナの代名詞的な呪文であり、アニメの一話完結のエピソードではこの呪文で話を終わらせることが多い。映画では必ずこの呪文で決着を着けるが、「一度目の発動時には必ず失敗する」というお約束がある。

第6話 「戦いの前奏曲」(後書き)

ようやく完成しましたー。待っていた方々申し訳ありませんシュウキです。

今まで重度のスランプにはまっついていて苦勞の末に完成させました。感想は活力となりますので皆様どしどし送ってください。リクエス
トもお待ちしています。

だんだん周りも動いてきてるなー・・・シュウキでした。

第七話 「決闘、そして宣言。」（前書き）

一か月振りの更新となりましたがお楽しみください。
感想・意見等お待ちしております。

第七話 「決闘、そして宣言。」

あらすじ

時空管理局と交渉しました。

SHUFFLE! の世界も混ざっていることが判明しました。

SHUFFLE! のヒロインのうち一人と交流を持ちました。

無茶するフェイトを助けました。

ドラグ・スレイブ気持ちよかったです。

知らないところでは色々動いてるようです。

海でのジュエルシード暴走事件の後、詰め寄ってくるクロノをめんどくさくなって電撃でビリビリにしたり。(頭はアフロになっていた)

神族や魔族など普段見掛けない人たちが増えていたり。(これはドラグ・スレイブを撃った影響かな？たぶん誰が撃ったか調べに来たと思う。・・・しかし結界破れたか。町には影響出ていないはずだけど・・・やはり気になると言ったらところかな？)

などあったが、まあ何とかなるでしょ。

そんな感じで、今僕は翠屋でいつものようにケーキセットを頼んでのんびりしていた。

「ぶ〜っやっぱりおいしいな〜。」

「よく来るけどお小遣い大丈夫なの？」

そう聞いてきたのはウエイトレスをしている美由紀さん。なのはの姉である。その母の桃子さんはこの店でパティシエをやっている。ゴ腕で有名なのだ。一回美由紀さんにお菓子とか作らないのかと聞いたら。

「ははは……どうせ私なんか……」

といて隅で体育座りになっていじけていたのが、記憶に新しい。

「これは、頑張った僕に対してのご褒美だから大丈夫です。」

「ははは……それならいいけど……」

この頃色々あったからな。妙な人が増えているし、能力の練習も控えてるからすこし物足りない感じがするし……。

「それよりも……あの妙に怖い視線をぶつけてくる人を何とかしてくれませんか？」

とその目線の先には僕に対して、ずっと怖い視線を送っているウエイターさん、恭也さんがいた。彼はなのはの兄で、なのはに近づくと男がいると殺気を出して威嚇し、告白した男がいると聞くと、そいつに襲いかかるというシスコンである。それは今では海鳴町の名物となっていると別のお客さんが話しているのを聞いた。……それはさすがにやばいと思う。というかそんなのが名物になるのはどこがおかしいと思う僕がいた。

「ははは……ごめんね。恭ちゃん、私じゃなかなか止まらないから……」

襲われないように行動しよう。

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第七話 「決闘、そして宣言。」

そんな感じでのんびりしていたら、なのはが帰ってきた。

「ただいまー……ってここにいた!？」
「やあ、どうしたの?なんか慌てているみたいだけど。」
「えっと……とりあえず来て!！」
そう言っつて僕の手をつかみ引っ張っていく。
「いやいやいや!?どうしたの、いきなり!？」
「部屋で全部話すの!！」
そう言っつて無理やり家の方に連れていかれた。その際桃子さんは「
あらあら」と笑っていて、恭也さんからはすごい殺気をぶつけら
れてすごく怖かった。

なのはの部屋に連れてこられてから話を聞いた。どうやらアルフが
ボロボロの状態となつて発見され、今は友達のところ保護された
ということだった。

そしてアルフから話を聞いたのと管理局の捜査の結果、首謀者はフ
ェイトの母に当たるプレシア・テストロッサ、ということが分かっ
た。フェイトに対して鞭打ちの虐待をしたのも彼女だ。プレシアは
昔管理局のとある部署で研究していて、とある事故で中規模の次元
震を起こしその際に色々揉めて更迭され、その数年後には行方不明
になつたらしい。

アルフは、フェイトがまた虐待を受けているのを知りそこに乱入し
止めようとしたが、返り討ちになつてとどめを刺されそうになつた
ので、咄嗟に転送魔法で地球に移したとのことだ。

……また虐待受けていたのか。ジュエルシードを渡すだけでは止
められなかった。その判断の甘さそれを痛感した。

そしてこの後のことだが、なのはとフェイトが、ジュエルシードを
賭け決闘をし、それに介入してくるであろうプレシアの魔法を逆探
知、そこに突入して確保するという流れだそうだ。……展開的に
は原作どうりだね。そんな事を思った。……一応確認してお

くか。

「なのは、フェイトに全て思いをぶつけて、なおかつ友達になりたい、その気持ちと覚悟は変わらない？」

「・・・うん、わたしは最初困っているユーノ君を助けるために手伝っていたけど、今はそれだけじゃない。フェイトちゃんに何も伝えられないままにいるのは嫌だ！だからわたしはぶつかって、それでわかりあって、友達になりたい！」

「・・・わかった、思う存分やって。僕が誰の邪魔も入らないようにするから。」

「！・・・うん！！」

そういつてなのは笑顔になってくれた。・・・これなら大丈夫かな。

「ところで、いつそれを実行するの？」

「・・・あ。」

「えっと・・・もしかしてわかんないとか？」

「にははは・・・」

いきなり暗礁に乗り上げたぞ。さっきの安心返してくれ。

そのあとクロノに連絡したら明日の朝早く実行するとの話だ。それを聞いてから僕はなのはに、早めに休むようにいつて高町家をでた。・・・すべては明日。物語はクライマックスを迎える。原作と同じになるか、それとも変わるのか。それは分からない。でも僕は最後まで目をそらさない。そう僕は決めたんだ。

早朝。海浜公園に行くとするのは達とアルフがすでにいた。

「後はフェイトが来るだけか・・・」

「なあ・・・」

「ん？」

アルフが、僕に声をかけてきた。

「フェイトは・・・これから助かるのかい？」

「ああ、もちろんだよ。絶対助ける。」

「・・・頼んだよ。」

「うん。」

話していると気配を感じた。どうやらフェイトが来たみたいだ。

「出て来て・・・フェイトちゃん・・・！」

『Size form』

バルディツシユの音声が静かな公園に響いた。皆一斉に街灯の上を見るとそこには金色の鎌を持ったフェイトが佇んでいた。

「フェイト・・・もう止めよう、あんな女の言うこと聞いちゃだめだよ！・・・フェイトこのまんまじゃ、不幸になるばかりじゃないか・・・だからフェイト！！」

アルフは心から叫ぶ。しかしフェイトはそれに対して首を横に振って否定した。

「だけど、それでも私はあの人の娘だから・・・」

なのは静かにセットアップする。その彼女の表情は悲しくも決意をした表情をしていた。

「ただ捨てれば良いって訳じゃないよね・・・逃げれば良いってわけじゃもつとない・・・！きっかけはきつとジュエルシード、だから賭けよう、お互いが持つてる全部のジュエルシードを！！」

『put out』

なのはがそう言うつとレイジングハートとバルディツシユは己が持つ全てのジュエルシードを輩出した。

「それからだよ、全部それから！」

なのはが構えるとそれに応じてフェイトも構えた。

「私達の全てはまだ始まってもない・・・だから本当の自分を始

めるために、始めよう最初で最後の本気の勝負！」
今から始まるのは本気でぶつかり合い、わかりあうための戦い。そして未来で同じ道を進めるための戦い。
「勝負の判定は僕がする。負けが決まった時点で僕が止める。アルフ！ユーノ！邪魔はするなよ？・・・それじゃ始め！！」
桃色と金色の閃光がぶつかり合った。

Side アースラ

「はぁ・・・戦闘開始みたいだね。」

「あぁ・・・」

モニターにはなのはとフェイトの戦闘が映し出されており、それをエイミイとクロノが一緒に見ていた。

「しかしちょっと珍しいよね、クロノ君がこーゆうギャンブルを許可するなんて。」

「まあ、なのはが勝つに越した事はないけど・・・あの二人の勝負自体はどちらに転んでも関係無いからね。」

そう言つて、コーヒーを一口飲んだ。

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれている内に、あの子の帰還先追跡の準備をしておく、つてね！」

「頼りにしているんだから、逃がすなよ？」

「おう、任せとけ！！・・・あら？」

「ん、どうした？」

エイミイが勇ましくガッツポーズをとったかと思つたら急に疑問顔になったのでクロノが聞いた。

「でもあの事なのはちゃん達に伝えなくていいの？プレシア・テスタロッサの家族とあの事故の事！」エイミイの真剣な声による一言によって部屋の空気が研ぎ澄まされていく。

「・・・勝つてくれる事に越したことはないんだ。今はなのは迷わせたくないし、それに、あいつの事もある。」

「あいつって・・・秀君の事？」

「ああ。・・・この間のアルフの話を知っているだろうから、余計に感情的になりやすくなりそうだしな。」

「・・・それクロノ君が言えるセリフ？」

「と・も・か・く・！今はなのはが勝つてくれる事を祈るとしよう。」

無理やり話しを切つて、再び映像を見る。そこに映っている二人は、互いに牽制しつつぶつかり合っていた。

Side アースラ end

桃色と金色の魔力がぶつかり合う。所々粗削りだが、二人の戦っている様子は踊っているようにも見えた。

しかし、なのはは魔法と出会ってからあんまり時間がたつてないはずだが今はフェイトと互角の戦いを繰り広げている。・・・これが主人公補正というやつかな。

お互いに魔力弾を放ち合い、相殺する。いきなり近接戦を挑めば、受けて立つ。そんな感じで互角の戦いを繰り広げていた。二つの杖がぶつかり合い魔力によって爆発が起こる。その爆発によってお互いが離れた。

「・・・あの時より強くなってるね。」

「フェイトちゃんも強いよ。」

二人が杖を抱えたまま話し始めた。

「ねえ・・・ジュエルシードのほかにも何か賭けない？」

いきなりフェイトがなのはに提案を持ちかけた。

「賭けるって・・・何を？」

なんだろう、なんか僕にとってあんまり良くない事が起りそうな・・・

「・・・シユウに一つ好きな事をしてもらう権利で、どう？」

「・・・うん、いいよ。」

「ちよつとまったー！ー！ー！いきなりなに決めているの!？」

「これで余計負けられなくなったね。」

「私も負けるわけにはいかないよ。」

「えっ、僕の意見無視？」

「はあー！ー！ー！ー！ー!」

「いつけー！ー！ー！ー!」

「うわっ！普通に戦闘再開しているし!？」

Side アースラ

ブリッジ全員モニターを見つつ啞然となっていた。

「・・・クロノ君」

「・・・ああ。」

「なのはちゃん、もう目的忘れてるよね?」

「・・・そうだな・・・でも戦いに集中できているし、目的にも沿っているだから大丈夫だ。」

「うん、せめてそのセリフはモニターを直視して言ってほしいよ。」

Side アースラ end

「・・・なあ。」

「・・・どうしたの、アルフ?」

「・・・なんでさっきまでの綺麗な戦いがここまでの地獄絵図になっているんだい!？」

「それは僕だつて聞きたいよ！！いきなり僕を商品にしたフェイトに聞いてよ！」

目の前の戦いは先ほどよりもお互いの出す殺気が比べものにならないくらいになっていて、お互いの攻撃が非殺傷設定であるのを疑うほど殺す気満々の攻撃を出し合っている。

フェイトの先ほどの発言のせいでここまでなつただけど・・・僕にいったい何をやらせる気だよ・・・。

「・・・これ、止めた方がいいのかな・・・？」

「絶対やめといた方がいいよ、ユーノ。その瞬間桃色の砲撃の嵐と、落雷によるフルボッコが確定するから・・・。」

「・・・（ブルブルブル）」

「うわっ！？こいつ、震えてる！？」

「（前になのはの砲撃食らつたのを思い出しているな）・・・たぶんトラウマが出てきたからほつておいていいよ。」

「そ・・・そうかい。」

改めて戦場の方をみる、おもわず、今つてゴールデンウィークだったなと現実逃避したくなる様な戦いはさらに激しくなっていく。

Side ????

「・・・使えない」

せつかく作つてあげたというのに、私の思うような成果を出してはくれない。やっぱり人形は人形ね・・・あの子供も興味はあるけど人形を守るような子だからいらない。

「・・・アリシア、もう少し待っていてね。」

もう少し、あともう少しであなたを蘇らせてみせるわ。だからあの人形、せめて最後の最後は使い物になりなさい・・・。

Side ???? end

Side フェイト

「はあはあ、．．．．はあ」

あの子、最初会った時より段違いに強くなってる。

特にシユウの名前が出てからは攻撃に鋭くなっている．．．やっぱりあの子もシユウの事が．．．？

．．．それでも、私は負けたくない！！絶対勝ってシユウに．．．．。

．．．でもこのままじゃ埒が明かない。今のところあの子と私は互角だ。それに魔力は残っているけど、体力の方がそろそろ限界だ。

特にあの子の方がそれが顕著かも。魔法の才能は目を見張るものがあるけど、対して体力がなさすぎる。私がつけているとしたらそこしかない。

．．．思えばあの子と私は何から何まで正反対だ。戦闘スタイルも真逆だし、互いの長所がそのまま互いの短所になっている。たぶん一緒に戦ったらいいコンビになれるかも？

でも今は決着をつけないと。

「はあ、はあ、はあ、．．．．すごいねフェイトちゃん。やっぱり強いや。」

「はあ、はあ、．．．．君もね。ここまで強くなるなんてすごいよ。」

「でも絶対秀くん（シユウ）を渡さないんだから！！！！」

（注 二人とも本来の目的を忘れていきます。）

「フェイトちゃん．．．いい加減埒が明かないから、次の一撃で決めよっか？自分の持てる全ての力を込めて。」

「良いね、賛成だよ。でも良いの？そんなに息上がっちゃっている

のに。」

実際このまま戦った方が、勝てる確率は高いんだけど・・・やっぱ
り正面から勝たないと勝った気がしない。

「大丈夫だよ・・・それに勝ったら・・・えへへへ・・・」
「！」

やっぱりこの子の狙いは・・・だったら早急に決着をつけなきゃ！

Side フェイト end

うわゝ、なんかなのはが怖い。しかもあの感じからして絶対何か企
んでるよね。フェイトもあんまり表情に出していないけど多少注意
が必要だし・・・うん。

「ちよつと一発ぶつけよう。」

「ちよつと待て！？あんたさつき手を出さなつて言つてなかつたか
い！？」

「いやもう引き分けで終わらせようよ。どっちが勝つても僕にとつ
てめんどくさい事が起きるし・・・」

「そこは同意するけど・・・たぶんもう間に合わないよ。」

「は？」いつの間にか復活したユーノ言われ二人を見る。

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのも
と撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・」

もうすでになのはをバインドで拘束して大技を繰り出そうとしてい
た。

「ライトニングバインド！？拙いよ、フェイトは本気だ！！」

既にフェイトの周りにはたくさんの魔力スフィアが形成されていた。

「フォトンランサー・フアランクシフト・・・撃ち碎け、フ
アイア！！」

その一言によつてスフィアから魔力弾が大量になのはに向かって降
り注いだ。一言でいえば弾幕。ただでさえかわせないのに、バイン
ドされているのははかわすことはできない。そのまま直撃し、な

のはの周りは煙に覆われた。

あの魔法って広範囲に大量の魔力弾を打ち込むから結構魔力消費しそうだよな。しかも広範囲に撃ちこむから無駄弾も多いし・・・煙がはれてきた。当のなのははというと・・・

「にはは・・・撃ち終わるとバインドも解けちゃうんだね、ちょっと危なかったかも。」

「えっ!？」「やっぱり。」

そこにはほとんど無傷のなのはがいた。

「冗談だろ!？フェイトの最高の魔法なんだよ!？」

さすがにフェイトもこの状況には啞然としている。まさか無傷とは思ってもみなかつたのだろう。まあ普通はそうだろうし。なのはの魔力量だからこそできる芸当ともいえるから。

「今度は・・・」

『Divine』

「こつちの番だよ!！」

『Buster』

なのはから放たれた桃色の砲撃。間一髪フェイトはシールドで防いだ。しかしさっきの大技での魔力と体力の消費がひどいのもうまともに戦えないだろう。

「受けてみて。デイバインバスターのバリエーション!！」

『・・・starlight breaker』

いつの間にかフェイトの上に移動していたなのはは周囲の魔力を集めていたんだけど・・・

「何だい、あれは!？集まっている魔力が尋常じゃないよ!？」

そう集めている魔力の量が半端ではないのだ。この世界は開門の影響によって魔力が濃くなっている、なので当然周囲の魔力を使用する収束砲の威力も上がっているんだけど・・・さすがに・・・やり過ぎだよ・・・

既にフェイトはバインドによって拘束されているのでかわすことはできない。ということ・・・

「これが私の全力全開！！スターライト・・・ブレイカー！！！！」
放たれた極太、そして極悪な威力のスターライト・ブレイカ。それはそのままフェイトを飲み込んでいった……。あれ、もしかしたらドラグ・スレイブ並みかも
そんな光景を見て皆一言

「ああ、悪魔だ・・・」
これが世に言う『白い悪魔』誕生の瞬間だった・・・

とりあえず、後でなのはとフェイトは説教するとして（無論約束を無効にさせる。本人の了承なしに勝手に決められたのだから当然）、フェイトの方は・・・うん、なのはがすでに救出しているから残り
は・・・

（ユーノ、アルフなのは達をすぐにアースラに転送を！僕は後回しでいい！）

プレシアからの攻撃の対処のみ！
ユーノとアルフをなのは達のそばにまでテレポートさせた。二人ともすぐに指示に従ってくれて、なのは達を移動させたおかげでプレシアの攻撃から逃れることができた。しかし、まだ攻撃は止まりそうにない

「夢符、二重結界！」即座に僕はスペルカードを起動させ雷撃を防いだ。しかしそのまま2撃目、3撃目が襲いかかってくる。皆が居なくなつたから僕に攻撃を集中させてきたか！

しかしその後の攻撃も僕の張った結界が無効化する。しばらく攻撃が続いていたが静かになった。

・・・攻撃がやんだ。どうやらもう攻撃は来ないらしい。

「大丈夫ですか？」

モニターが現れ、そこにはリンディさんがいた。

「ああ、あのくらいの攻撃なら、何発受けても大丈夫です。それよ

り、フェイト、なのは達は？」

『・・・彼女達は、こちらで保護しました。できればあなたにも来てほしいのですが・・・』

「大方、目的は戦力の増強と報告つてところでしょうか？・・・いいですけど、その代わりこの事件が終わったあと、僕に関するデータをすべて消去する事。それが約束できないのならば、協力はできません。」

『・・・わかりました。艦長権限でどうかします。今から転送魔法でこっちに来てもらうけれど、いいかしら？』

「はい。」

そう答えると足元に魔法陣が現れ、次の瞬間にはそこから僕は消えていた。

アースラのブリッジに通された時、そのモニターに武装した人たちが突入していく様子が映し出されていた。ついに黒幕とご対面というわけだ。

「シユウ！」

聞き覚えがある声が目の前から聞こえた。前を見ると病人かのような白い服を着たフェイトがいた。その隣にはなのは、ユーノ、アルフが立っていた。

「大丈夫なの、秀君？」

「うん。攻撃は全部防げたから。怪我とかは全然してないよ。」

その言葉を聞いて皆ほっとした感じになった。

「所で今の状況は？」

「今、フェイトの母親・・・プレシア・テストロッサのところに武装局員が向かっているところだ。」

クロノが答える。

『総員、玉座の間へ侵入！目標を発見！』

モニターからの声で周りの人から緊張が走る。

そこを見ると、数人の魔道師がデバイスを構え一人の女性の前に立っていた。『プレセア・テストロツサ！時空管理法違反、および管理局艦船への攻撃容疑であなたを拘束、逮捕をします。』

管理局員が彼女を取り囲み、その玉座の裏にある扉に入る。そこにあつたのはたくさんの円柱の容器。ツタが巻かれ、その場所は普通よりも恐ろしく感じた。しかしその奥にあるものに僕たちは驚愕した。

「！？」

皆言葉を失った。その一際大きな容器の中にはフェイトと瓜二つの少女が入っていた。

「あ……あ……あ……あ……」

フェイトはたぶん一番驚いていたと思う。言葉を紡ぐ事も出来ず茫然としていた。フェイトはこの事を聞かされてないのだから当然だろう。

「グアッ！！」

突然だった。その容器に近づこうとした一人の局員が吹き飛ばされた。その前にはいつの間にか現れたプレシアの姿があつた。その表情には怒りしかなかった。

「私のアリシアに……近づかないで！」

「撃て

！！！」

いきなりの攻撃に対して魔道師達が反撃を開始した。しかしその攻撃はすべてシールドによって防がれてしまう。それからは圧倒的だった。

彼女の放つ雷撃によってそこにいた管理局員次々と倒れ、反撃も全てシールドによって防がれてしまう。

そしてその場にはプレシアと倒れた管理局員しか残っていないかった。リンデイが指示を出し転送魔法によって局員が回収をする。プレシアはその事を見ていなかった。彼女の眼に映っているのは容器の中に入っている少女だけだった。少女に寄り添うようにして……プレシアは口を開く。

『たった9個のロストロギアではアルハザードにたどり着けるかわからないけど……けど……もういいわ。この子を亡くした時の暗鬱な時間も……この子の身代り人形を娘扱いするのも。』
「っ……」

思わず声を漏らすなのは。……たぶん彼女にはプレシアの言っている意味は分かっているまいだろう。

「あなたの目的は、死者蘇生ですね。」

……理解できている僕自身嫌になる。でも最後まで関わるって決めたんだから目を逸らしちゃだめだ。

『ふふ。わかつている子もいるみたいね。』

……冷静に、冷静に。

『折角、アリシアの記憶を与えたのに……役立たずでちっとも使えない……あなたの事よフェイト。』

「やめて……」

なのはが少しつぶやく。プレシアはそれに構わず続ける。

『アリシアはいつでも私に優しくかった。あの子はあなたよりもっと優しく笑ってくれたわ。時々わがままも言ったけど、私の言う事をとてもよく聞いてくれた。』

「やめて……やめてよ……」

『アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰めに使うだけのお人形……
……フェイト……あなたの傍に居る者たちは知っていたかしら？あなたが……』
「アリシアのクローン」だって言う事に。』

「やめ「言いたいのはそれだけ？」秀君!？」

「だまつてりや言いたい放題言ってくれたね。フェイトが人形？ふざけんな!!この子は一生懸命あなたのために傷つきながらもジュエルシードを集めようとしていたんだ!何かを傷つけるのが嫌なのにだぞ!」

『そんなこと。』

「あなたはそもそもアリシアが死んだことから目を背けて自分の都合のいい幻想に逃げ込んでいるんだよ!そもそもアリシアのがそれ

を望んでいたのか！？ちがうだろ！彼女が望むとしたらそんなことじゃねえだろうが！」

「知りもしない癖に……！！……いいわ、それでも……私はそれでもアルハザードへたどり着いてみせる！！アリシアを蘇らせるために。」

「母さん！！」

フェイトは叫ぶ、しかしもうプレシアは戻れない。

「母さんって呼ばないで！！私はあなたが嫌いよ、人形！！！！」

フェイトの心が折れた。それはフェイトが倒れるという形になって現れる。

「フェイトちゃん！」

もういい。自分の事を、本当に大切に思ってくれた人に対して、その怒りを押しつけて一人満足しようだなんて思考回路は絶対に認められない。

モニターの人物が、どんな思い出を持ち、どんな過去を歩み、どんな未来を歩もうとしたのかよく知らない。

でもこれだけは言える。この人間を認めちゃいけない。許しちゃいけない。

「いいよ。プレシア・テストロツサ。誰かを傷つけてまでそのくだらない幻想に縋りつくというのなら。」

もう、超えちゃいけない一線を越えてしまったのだから。

「今からそこに行く。……あんたのそのくだらない幻想をぶち殺すために！！」

モニターを睨みつけ宣言した。

この瞬間から、彼の本当の戦いが始まる。

To be continue next story .

次回予告

物語はクライマックスへ。ジュエルシードを制御し、膨大な力を得

たプレシアにどう立ち向かうか？

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術書

第8話「最終決戦」

「切り札って言うのはね最後の最後まで取って置くものだよ！」

第七話 「決闘、そして宣言。」（後書き）

どうも シュウキです。約1月ぶりとなる更新ですがいかがでしたでしょうか？

ようやくここまで来たかと思えます。

突然ですがアンケートを取りたいと思います。活動報告でも書いていたのですが、Asまでの日常編についてです。今のところシャツフルからシアとネリネと亜紗。なのはからはなのはとアリサとすずに関する話は決めているのですが主人公と戦闘を行うキャラクターをまだ決めかねている状況です。なので、このキャラクターとの接点がほしい、やこのキャラと戦わせてほしいという意見を出してほしいのです。

期限としては次の更新までとさせていただきます。

キャラクターに関しては今使っている、なのは、SHUFFLE、ネギま、以外でもかまいません。もしかしたら物語にも関係してくるかもしれませんが（一発キャラになるかもしれないですが）なので皆さんの意見お待ちしています。

ちなみに僕が少し考えていたのは東方の洩矢諏訪子とか。

次回の更新については決まりましたら活動報告の方に書きます。

それではまた次回の更新にて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8447i/>

魔法少女リリカルなのは とある少年と魔術の書

2011年1月5日03時24分発行